鷺の巣はとゝぎす

古歌に

鷺のふる巣よりたつ郭公、藍よりいでゝあゐよりぞ濃き

とあり、父母なき子が他人に養育せらるゝものにいふ。

浮水の龜

法華經に、如三一眼之龜、値二浮木孔一といふこ とあり、あひがたきことのたとへにいふ。

うその皮の八百

堀川狂歌集に

菊水をくみし彭祖がながいきもまことにならじうその八百

とあり、又陳多女耶演枕に「しわいことのうきの八百長者經とな

ぞらへ云々とあり、嘘の多きことをいふ。

牛を以て馬に易ふ

晉の本姓は司馬なり、瑯琊王の妃と、小吏牛金と私通して元帝を生む、元帝實は姓牛なり、因て牛を馬に易ふといふ、事實をごまかすことをいひしなり。

歌ふも舞ふも法の聲

倭訓集に、狂言綺語も佛乘の因と白樂天のいひしはこれなり、後拾遺に遊女宮木の歌として

津の國のなにはのことがのりならぬあそびたはむれまてとそきけ

とあり。

又歌ふも舞ふも糊の聲といふあり、こは法の糊と通じたるにて、歌ふも

舞ふも生活のためといふ義なり。

、内股膏藥

芦屋道滿大内鑑に、かの道滿の内股膏藥、頼んではかへつて妨げ云々とあり、あちらへもつき、こちらへもつくことをいふ。

内兜を見すかす

人の心中を見すかすことをいふ、堀川狂歌集に

今はとて思ひ〳〵の結がきれば内かぶとをや人に見られん

獨治の大木

浮世ばなしに見ゆ、ウドはウロの轉じたるものにして、ウロは空洞のことをいふ。

、鵜の眞似をする烏は水をのむ

漢書に、效二季真一不レ得、陷爲二天下輕薄子一、所レ謂畫虎不レ成、反類レ猫也とあり、この意と同じ、宗賦法師が廻國雜記に、土佐の烏川にて

とりもにぬ魚の心もはぢもせでうのまねしたる烏川かな

とあり、技の未熟なるものが技の熟したるものゝ如くせんとするときは失敗を招くとの意。

鵜の目鷹の目

世事百談に、目かどをつけて人を見るを鵜の目鷹の目にて油斷のならぬなどいふことあり、又小野道風青柳硯に、別れてひとり歸へる道、大蔵がものどもに見附けられたる鵜の目鷹の目、逃るも甲斐なき羽抜鳥云々と見ゆ。

生まぬさきのむつきさだめ

吾吟我集に

冬にたつかすみのきぬは佐保姫のうまれぬさきのむつきさだめか

とあり莊子に、見レ卵而求二時夜一、見レ彈而求二鴞炙一者乎といふも同じことなり、前より用意することにいふ。

賣り詞に買ひことば

晏氏春秋に、與聞レ之、伴問者伴對レ之とあり、われ人をあざむけば、人も亦われを欺くの意。

魚心あれば水心

人がわれに親切なれば、我も人に親切にするの意、交の魚と水とを合甘見よ。

魚と水

三國志の諸葛亮の傳に、先主與レ亮情好日密、關羽張飛不レ悅、先主解レ之曰、孤之有二孔明一、猶二魚之有一レ水也と、天の細島にも、水と魚とは連れて行く、われも小春と人づれとあり、情好の親密にして離れんにもはなれがたきをいふ。

裏釘かへす

御所櫻の堀川夜討に、そりや互に時の運、うら釘かへすな、一寸も待れぬ、この坐は立たせぬ云々とあり、念の上にも念を入ること。

海ゆかば水つくかばね

萬葉集の大伴家持の歌に、

海ゆかば水つくかばね、山行かば草むすかばね云々とあり。

上見れば程なし下見れば程なし

唐話纂要に、比レ上不レ足、比レ下有レ餘とあり、浪枕に、よみ書き算盤はかりの目、上を見ればほうづがない、我より下を手本として云々とあり、意おのづから明かならん。

上を見な

駿臺雑話の東照宮のいましめに見たり、われより上の人を見てうちやむなとの意。

うなるほど金を持つ

勞海一銀といふに、金錢を多く儲けつみたるを、うなるほど金をもつといふとあり。

稅があがらぬ

稅とは大工の言にて、立みぞにあたる柱なり、家を建てゝ棟上ることを、稅が上るといふ、何事もおふやうに成功せざることをいふ。

氏よりそだち

荀子に、于越夷貉之子、生而同レ聲、長而異レ俗、教使二之然一也とあり。

又古歌にも

氏よりもそだちなりけり人はたゞ花はみよし野月はさらしなとあり、論語の有レ教無レ類といふも同じ意なり。

氏なうて玉の輿

犬子集に、果報ある身や乘る玉の輿といふ句に美女はたゞ氏のなきをもてはやし

とあり、女は容貌が美しければ、賤しとも貴きに嫁することを
るとの意。

後に目なし

鄭八卦桂屑に、背に眼のなきうたてさよ」とあり、一方だけ見にて
一方の見わぬ不見識をいふ。

後の目壁の耳

太平記に、後の目壁の耳、いかでか隠れあるべきとあり。

内で掃除せぬ馬は外で毛をふる

學友抄にあり、小兒の躾助にてその家庭のさまを知らるゝの意。

内鼠

他我身の上に、我一人の子をもちたりといへども、この子内鼠にて、

わが内より外を知らざれば云々とあり、世間知らずのことをいふ。

自惚さかさけのないものはなし

自分のことをよいとすれば、當らぬものはなしそのたとへ。

上見ぬ鷲

俗に上見ぬ鷲といへり、鷹ぼ鳥を日喰ひて空を見るは、鷲の來る
かと疑ふなり、鷲はその用心なし云々と傾聞の來に見ゆ、人を人
とも思はぬことにいふ。

馬を牛に乘りかふ

山房夜話に、得レ牛還レ馬とあり、よきものを捨てあしきを取るにい
ふ牛を馬にかふとはその反對なり。

梅を語れば口中酢を生ず

佛書に、有レ人談二酢梅一、口中水出とあるに本づく。

瓜の蔓に茄子はならぬ

唐話纂要に、種レ瓜得レ瓜、種レ豆得レ豆とあり、凡庸なるもの子に非凡なるものは生れずとの意。

魚を得て筌を忘る

筌とは魚を捕る器なり、莊子に得レ魚而忘レ筌とあり、故事類林に受レ恩不レ報、曰レ魚忘レ筌と見ゆ、恩をわすゝことをいふ。

魚の木に縁るが如し

利漢故事要言に、何事によらず、ことのなすべきことあるを案じおもひて苦にすることをいふ。

瓜二つ

唐衣橘種に、みたところ瓜を二つに櫻花、よそにはの雪峰の白雲といふことあり、よく似たるをいふ。

馬方船頭お乳の人

西鶴織留に、心だてのあしきものを、馬方船頭お乳の人と申せど云々とあり、御しがたき横着なるものをいふ。

うはさをすれば影

人のうはさをすれば、その人がそこに來るとの意。

上を下へかへす

源平盛衰記に、頼政化物を射おとしければ、貴賤上下女房男房、上を下にかへし云々とあり、大さはさすることをいふ。

一打てばひゝぐ

物かずいはぬ人にても、問へば答ふるをいふ。

内のさゝやき外のどよみ

管子に、不言之言、聞二雷霆一といふと意同じ、内でひそ〳〵といふことも外には大き〳〵聞ゆるとの意。

薄紙をはぐやう

新氣の次郎々々にようなることをいふ。

嘘から出たまこと

人をあざむかんとして言ひしことも、終に欺き得ずして、その言を質にするをいふ。

旨いもの食する人に油斷すな

うまいものを食せておいて、無用なことを頼み、のつぴきさせぬことあるものなれば、油斷すなとの意。

馬は武士の寶

源平盛衰記に、よき馬こそ武士のたからなれ云々と見ゆ。

海に千年川に千年

手にも足にもかゝらぬ老猾のものをいふ。

運は天にあり牡丹餅はたなにあり

論語に、子夏曰、商聞レ之矣、死生有レ命、富貴在レ天と、運は天にありとのことをいひなり。

運否天賦

人の運の吉凶は天にまかすより外なしとの意。

梅の香を櫻にもたせ柳の枝に咲かせたい

俗歌をそのまゝにいひしもの、て、思ふ存分にしたいとの意。

飢たる時は藥でも

孟子に、飢者は食をあくんじ、渴者は飲を甘んず とあり、かつたるものは食もののよしあしを撰ばぬとの意。

うんだとも潰れたとも

音沙汰をせぬことをいふ。

後辨天前板額

うしろ姿は美人のやうなれど、前から見れば見ぐるしとの意、後千両前一文といふに同じ。

（俗語）

如レ馬

物の大なること とをいふ。本草綱目の時珍にいふ、俗に物の大なるものを稱して馬となすなりと。

書經の五子の歌に、鬱陶乎予心 とあり、氣のもつれたるをいふ。

鬱陶

いまだ物の定まらぬことをいふ。

稚々

いやなること、なやましきことをいふ、煩惱の字を用ふ。

惱

史記の孟子の傳に、迂遠にして事情に潤しとあり、まはり遠きことをいふ。

迂濶

史記の汲黯の傳に、吾欲二云々一とあり、師古の註に、猶レ言レ如レ此也とあり。

云云

うんじばる

俗み果つるなり。

雲泥

白樂天の詩に、會面隔二雲泥一とあり、はるかに離れた

るをいふ、一一の差、一一萬里などいふ。

兎毛の末　梁惠王の篇に、明足以察二秋毫之末一とあり

和訓の栞にも毫末の戮なりとあり。

時經に、多言以相訕なりとあり、あつまりて誹ずるをいふ

噂

影譏　河海抄に見ゆ、してはならぬことの意。

迂詐　偽をうそといふはこの字を用ふ。

胡乱　伊洛淵源錄に、胡説亂道とあり、中華の俗語と見ゆ、みだりがはしきことをいふ。

卯の花くたし　四月より五月にかけて降る雨をいふ。

うつゝをぬかす　本心を失ふほど物に迷ひこむことをいふ。

(の)

農民の息が天に上る　日談に、蚕の息が云々とあり、下のものゝ聲が上に聞ゆることにいひしなり、出所を詳にせず。

能ある鷹は爪かくす　貶賈深藏如レ虛と老子に見ゆ、これと同じ意にて、才能ある人が、才能を世にかくすことをいふ。

喉元すぐればあつさを忘る　困難の境遇を脱すれば、忽ちその困難なりしことを忘るゝの譬。

能書筆を撰ばず　よく字をかく人は、筆のよしあしを擇ばぬとの意。

暖簾の脛おし

力を入れても効のなきことをいふ。

登り坂あれば下り坂あり

盛んなることあれば衰ふることもあるをいふ。

呪ふことも口から呪ふ

心に迷ふことあつて人に問ふに、この人吉事なりといひたるは嬉しと思ふばかりなれど、凶事といひたるは、果して凶事ならんには、わが愚痴なることを知らずして、その人を憎むがごときをいふ。

（俗語）

蚤取眼

のみを捕る時の如く、眼をすにて捜し求むることをいふ。

鋸あきなひ

鋸商の習慣よりいひしことにて、鋸商人が

甲地にてその物産と交易し、これを乙の地にて賣り、乙地の物産を買ひ來りて甲地にて賣るが如く、來往ともに利することをいふ。

狼煙のら

酉陽雜俎に見ゆ、狼糞煙直上、烽火用レ之とあり烽火に狼燈の字を用ふるはこれに本づくならん。

萬葉集に、草の字をのらと訓ず、野原のことをいひしにて

ハハラのハを省きしならん。

僧正遍照の歌に

里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋ののらなるとあり。

履は新しといへども冠とせず

史記に、賈生曰、冠雖レ敝、必加二於首一、履雖レ新、必履二於足一とあり、貴賤上下の差あるをいふ。

口猶乳くさし

漢書の高祖紀に、口猶乳臭とあり、幼少なるをいふ。

くらげも骨にあふ

博物志に見ゆ、天性受レ骨ざる幹にあふは、骨なきくらげのほねあふとひとしといへる意ならん、仲正の歌に

わが戀は海の月をぞ待ちわたる、くらげのほねにあふ世ならぬや

とあり、〇〇〇海月の字をかけり。

愚人夏のむし飛んで火に入る

後魏史に、崔浩がいふ、夜蛾之赴レ火云々と、又事文類聚に、愚人貪レ財、如二蛾赴一レ火とあり、われから難に飛び入るをいふ。

黒犬にくはれて灰の和滓に怯る

唐俗奕いふ、懲二沸羹一者吹二冷齏一、傷弓之鳥驚二曲木一とあり、灰のたれかすは黒いものゆゑ、黒犬にくはれると黒いものが物そろしくおもはるとの意。

會稽の耻をすゝぐ

史記の貨殖傳に、勾踐十年國富、遂報二強吳一、刷二會稽之耻一とあり、かたきをうちし意。

朽蠅にとりつくが如し

書經に、予臨二兆民一凜乎若三朽索之馭二六馬一とあり、恐りすることのならぬをいふ。

唇うすきものはよくものいふ

肥瘦篇に、唇薄輕言とあり、意は明かなり。

唇かけて齒寒し

戰國策に、趙之於二齊楚一陰敝也、猶二齒之有一レ唇也、唇亡則齒寒

といふに本づく

光陰矢の如し

山谷の詩に、日月過箭疾とあり、月日の經過することのはやきをいひしなり。

管の穴から天をのぞく

史記の篇鵲の傳に、若二以レ管窺レ天、以レ郤視一レ文とあり小きものより大きなところを視ればやはり小く見ゆるとの意。

蝸牛の角の爭ひ

莊子に、蝸の左角に國するものあり觸氏といふ、時に相與に地面を爭ふて戰ふ、伏尸數萬、遂に和し旬有五日にして後反すとあり、世のはかなきにたとふ。

藥人を殺さず醫師人を殺す

東坡文集に、蜀の諺にいふ、學レ醫者紙致、學レ醫者人致

とあり、意はおのづから明かなり。

勸學院の雀は蒙求を囀る

勸學院は藤原氏の人が學問する所の名にして、三條(京都)の北壬生の西にあり、今その遺址を雀の森といふ、學問の甚だ盛なりしことをいひしものにて、雀とは僕隸の名なり、支那にてもこれと似たることあり、笑苑千金に、雀記二論語一とあり、亦は同じ。

愚者の一得

史記の淮陰侯の傳に、智千慮、必有二一失一、愚者千慮、必有二一得一とあり、(ち)の部參看せよ。

禍福無レ門たゞ人の招くこゝろ

わざはひも、さいはひも、人がまねくものとの意。

口は禍の門

ものかずをいひて、爲めに災難を受くるの謂ひ。

水母は鰕を目とす

爾雅翼に、水母ネレ能動、蝦附レ之則、所レ往如レ意とあり。

臭いもの身知らず

おのれの短所は、自分には左程にも思はぬをいふ。

九十大久保百酒井

德川幕府のころ、旗本家人の中に大久保酒井の二姓尤も多かりしことをいふ。

果報は寢て待て

幸福はおのづから來るべしとの意。

瓜田の履李下の冠

瓜田に履を納れず、李下に冠をとゝのへずといふことあり、嫌疑を

遊けんが爲めなり。

（俗語）

供養 禮記の月令に出づ、佛まつりすることをいふ。

過半 易の繫辭に、思過レ半矣とあり、半分以上といふの意。

過當 史記の匈奴の傳に見ゆ、多分といふと意は同じ。

勸請 法華經に見ゆ。

勸進 文選に見ゆ、今の乞兒することを勸進するといふは是なり。

守レ株 韓非子に、宋人有二耕田者一、田中有レ株、兎走觸二折レ頸而死一、因釋二其來一而守レ株、冀復得レ兎、兎不レ可二復得一云々とあり、人の愚にまどふことをいふ。

吻黃 世說に、黃吻年少とあり、年少の人をいふ。

火急件 六祖壇經に、火急速去とあり、せはしなきこと。

件は文に件とあり、旁に牛の字をかくは、牛は物の大なるものにして、分りやすきが故なり。

草臥 もと山法師の峯に入り修行するより起れる詞にして、草の上に臥するの意より出づ。

掛二口端一 古歌に

あはれてふことこそ常の口のはに掛るや人を思ふなるらん

回祿 春秋の昭公十八年の傳に、鄭子產禳二火於玄冥回祿一とあり、玄冥とは水の神、回祿とは火の神なり、今火事を回祿といふ。

頽墮

源氏 桐壺の卷に、くちおしふおもひくづをるとあり。

諄

諄 甘 重 複 也、と時經に見ゆ、おしへるとをくりかへす より出づ、くどくしいふと同じ。

（や）

燒野の雉子夜の鶴

白氏 文集の琵琶行に、 第三弟四絃 冷々、 夜鶴憶レ兒 籠中 鳴とあり 又 諸 曲 唐 船 に、たとへば親の子をおもふごと、 人倫に隙らず、燒野の雉子夜の鶴、 梁の燕も皆子ゆゑこそもの思へ云々とあり。 愛情の切なることにいふ。

燒餅を燒く

りんきするをいふ、もと遊女より出でたるなり、やくとは隙すことをいふ、花街にてひいそめし流言なるべし。

養由に弓をいふ

釋迦に説法といふに同じ。

養子には臍の上へ帶をしめたものをもらへ

きまりあるものを養子にせよとの義。

山に躓かずして 垤 に躓く

韓非子にあり、大なるものには躓かずして小なるものにはつまづくとて、注意するとせざるとにて斯くもなるものとの意。

柳に雪折なし

利休の歌に

降ると見はつもらぬさきに拂へかし、雪には折れぬ青柳のいと

とあるに同じ。

凶暴は貧から茶は罐子から

孟子に、富歳子弟多レ賴、凶歳子弟多レ暴とあるに同じ。

（五）

蒔かぬ種子は生えぬ

法苑珠玄に、何有下不レ下レ種而獲二果實一者上とあるに本づく。

麻姑を雇ひて痒所搔くべし

列仙傳に、方平といふ者の妹に麻姑といふ仙人あり、其の手爪の爪に似たり、蔡經といふもの私に念ふは、背の痒きとき、麻姑が爪にて搔きたらんには佳ならんと、方平即ち知つて蔡經が背を鞭つて曰く、麻姑は仙人なり、汝その爪にて背の痒きを搔くべしといはんやと云々、麻姑は麻姑の手といまもいへり、この諺はおもふまゝになりて遺憾なきをいふ。

萬能足りて一心足らず

古歌に

枝葉よりとかくこゝろの根が大事、萬能よりも一心を知れ

とあり、萬藝に通じたれども、いづれも上達するところなしとの意。

曲つて釣針

川中島合戰記に、人を欺き、邀表、今日の振舞に顯はれ、本心曲つた釣針につらるゝ勘介ではおちやらしませぬ云々とあり、人を奸計に陷れんとするものゝ心の曲れるものをいふ。

枕を高くして臥す

史記の張儀の傳に出づ、意はおのづから明かならん。

待つ人の來るは蜘蛛の擧動にて知らる

衣通媛の先恭帝を待つ歌に

わがせこの來べき宵なりさしがにの、くものおこなひ今宵しるしも

あり、その出所は外にある群かならず。

待てば甘露の日和あり

待てば海路の日和あり

何れも意は、時節を待てとのことなれども、いづれが本にして何れが末

したるやを知らず。

眞綿に針をつゝむ

やさしき詞の中に、とげ〳〵しきところあるをいふ。

眉かゆければ思ふ人を見る

埃嚢抄に、まゆといふは僻事なり、まゆめなるべし、遊仙窟にいふ

昨夜眼皮かゆくして、今朝良人を見侍りとあり、まゆめとは眼皮をい

ふなり。

孫かはんより狗子かへ

不孝なる子をもちて一生心配せんよりは、身分ひくき者の子なりとも

わが身の助となるものを養へとの意、狗子とは賤しきものゝ子とい

ふ義なり。

馬子にも衣裝髪かたち

衣裝髪かたちさへ立派なれば、身分のいやしきものにても、貴き人の

中間入りをせらるべしとの意。

繼母の朝笑ひ

繼母が、朝は笑顔を見せて、後に呵責する如く、はじめは溫和にして後に酷薄なるをいふ。

(け)

螢雪の功を積む

晉書に、車胤字は武子、家貧しく常に油を得ず、夏月には練囊に數十の螢火を盛つて以て書を照じ、夜をもつて晉につぐ云々、又孫氏世錄に、孫康家貧しく油なし、常に雪に映じて書を讀む云々とあり、ともに苦勞することをいふ。

鷄口となるも牛後となるな

戰國策に、蘇秦爲レ趙合從、説二楚王一曰、臣聞鄙諺云寧爲二鷄口一、無レ爲二牛後一とあり、小くともよいものゝ先になれとの意。

今日は人の身の上、明日は我身の上

平家物語に、惡源太義平死に臨んで、平家の士に對して言ひたるに、今日は人の身の上明日は我身の上とあり、又新古今集にも

なき人をしのぶることもかつまでぞ今日の哀れはあすのわが身を

とあり、これも同じ意なり。

下戸の建てたる倉もなし

家中竹馬記に、上戸は酒にまどひつゝ世ざまわびしと申せども、生れつきたる貧福は、下戸のたてたる倉もなし云々とあり。

傾城の空泣

錦花翁隆志の句に、傾城の涙で庫の屋根かもり」とあり、これによるか、出所詳ならず。

藝は道によりて賢し

論衡にあり、從レ農論レ田、田夫時、從レ商講レ賈、賈人賢とあり。

（ふ）

武士は食はねど高楊枝

利をとることを恥とし飢餓に迫るとも卑劣の行ひをなさぬ武士氣質のことをいふ、孟子に「無二恒産一而有二恒心一者、惟士爲レ能」といふことのあるに同じ。

武士の三忘れ

御所櫻堀川夜討に、總じて武士の戰場へ赴くときは、三忘と申して、忘るゝこと三あり、國を出るときは家を忘れ、境を出るときは妻子を忘れ、敵陣に臨んで我身を忘るゝ、とあり。

二人前は働けぬ

品字箋に、一身二人の役に丸て辭しとあり、一人して二人の役はつとまらぬといふことなり。

淵は瀬となり、瀬は淵となる

世の變遷の常なきことをいふ、古き歌に

世の中は何が常なるあすか川、きのふの淵は今日の瀬となる

不動の金縛

動かぬことをいひしなり、眞言秘密の法にして人を動かれぬやうにするなり。

駘の水飲むやう

あぶ〳〵することで、苦しき境遇にあるをいふ。

鮒の念佛

和漢故事要言に、命窮りたるを知るときは、日頃のおごり氣、むさぼる心も失せて、哀働の情一身に充つるならひなれば、常にその放心を治め、奢りを退けて、日に善にすゝまんことを思へとの心也とあり、これは莊子から出たことである。

嚬鼻揮しめてかゝれ

輕忽にするな、用心して力を入れて着手せよとの意。

ふられてかへる果報者

先方が好意をつくしてくれざりしが却て身の幸福なりとの意、遊廓に通ひ藝娼妓にふられて歸るものが、幸福であるとの意。

古川に水絶えず

富家が破産してもまだ幾分の財産をのこすといふやうなことにいふ。

風呂敷ひろげる

誇大の言をいふを斯くいひしなり。

蜉蝣の一期

人世のはかなきをいふ、白樂天が詩に、長生無二得者一。蜉蝣一とあり、蜉蝣は朝生れて夕に死する虫なり。

風前の燈

今の前に死するか亡るかといふ危きことの喩。

夫婦は二世親子は一世

和漢故事要言に見ゆ、意はおのづから明かなり。

夫婦喧嘩は犬も喰はぬ

犬も喰はぬとは、至極つまらぬものとの意、夫婦間の爭ひは多く痴情に出で痴情におさまるものなれば、これを仲裁するの馬鹿々々しきをいふ。

河豚は食ひたし命は惜し

花陣綺語といふに、一時は利ある ことも、後に大害ありと知らば、止むること などの譬にいふ、とあり、河豚は美味なれば食ひたけれども中毒の恐れありとて躊躇するとの意。

袋の中の鼠

遁げる道なき窮狀をいふ。

布施ない經には袈裟をとす

報酬の少きには、勤むること薄しとの義、狂言記に、怒じて布施無經には袈裟を落すと申すことがある、さらば悪僧も袈裟を落いたと申して布施物を取らうと存ずる云々とあり。

鮒のごみに醉うたやう

田舍ものが都會のにぎやかなに目が眩んで驚くがごときをいふ。

船は帆で持つ帆は船で持つ

相待つて用をなすにいふ。

冬編笠に夏頭巾

物の顚倒したことをいふ。

富士の山を蟻がせゝる

微力なるお大なる事をなさんとするに喩ふ。

不義の富貴は浮べる雲

論語に、不義にして富み且貴、於レ我如二浮雲一といふに出づ、不義から得た富貴は根がないものとの意。

（俗語）

風聲鶴唳

うたがひおそるゝこと、又は臆病なることにいふ秦の符堅が晉を討ち謝玄のために破られ風聲鶴唳を聞いても皆晉の師かとおそれたといふに出づ。

袋耳

一度聞きて忘れざるをいふ。

豚の木登

到底能はざるをいふ。

踏みつくる

他人を輕蔑することにて足下にかけるといふの意、つまり人を馬鹿にするのいひなり。

分相應

貴賤貧富それ〴〵の分際に應じて世に處するをいふ。

不夜城

瓦斯、電氣燈などの煌々として夜も尙ほ晝の如くあかるきさまをいふ。

富樓那の辯

フルナは辯舌に巧なりしをいふ。

温レ故知レ新

論語に見ゆ、一一一一可二以爲一レ師矣と、蓋知識ありて新知識を得るの義。

覆水盆にかへらず

こぼれし水が再び盆にかへらぬやうに一旦離縁した夫婦はもとに返らぬとの義、太公望の故事より出づ。

風馬牛　遠く隔ち居ること、かけちがふことにいふ、左傳の僖公　四年の條に見ゆ。

符節を合す　よくあふこと、符節とは割印した札にして昔時戰爭の時に用ひしもの。

普天の下、率土の濱　あめが下といふことなり、詩經の北山の篇より出でたり。

（乙）

後悔先に立たず

事の過ぎし後にくやみても甲斐なしとの義、古今集に

さきだゝぬ悔のやちたびかなしさは流るゝ水のかへりこぬなり

とあり、又奥儀抄にも、うせにし人にさきだゝぬを後悔さきにたゝぬによせてくひたるなり、とあり。

後悔臍を噬む

臍をかまんとするも及ばす故に後悔の及ばぬにいふ、左傳の莊公の條に、若不二早圖一、後君噬レ臍とあるに本づく。

弘法も筆の誤

如何なる功者なるものも、千に一つの誤なきをずとの義なり、弘法は博識多才にして殊に書を善くせり、その頃嵯峨天皇と橘逸勢とを合せて三筆と稱せしが殊に弘法は古今に比なき執筆の殿正なる人といはれたり、かゝる人にても多く書く中には誤りなきを保しがたし弘法かつて勅命により應天門の額を書きしに、その應の字の上の點がかけてあつたといふに本づくならん。

故郷には錦を飾る

史記の項羽の本紀に、項羽曰、富貴不レ歸二故郷一、如二衣レ錦夜行一、誰知レ之者とあり、他國へ修行に出で辛苦をかさねて立身出世し、故郷こ歸るときには立派に着かざりて、今の顯榮を人に示すのお本意なれとの意なり、後選集に

もみぢばをわけつゝ行けば錦きて家に歸ると人や見るらん

虎穴に入らざれば虎子を得ず

後漢書の班超の傳に見ゆ、難儀をしのがざれば大利を得ることはならぬものとの意。

此處までござれ甘酒進じやう

南瓜咄といふに、昔さる人のいふ、友だちには相應したる友をもと

めたるがよきといふことに、古人云、君子交淡如レ水、小人交甘如レ醴、それより子供の友だちと語らひて、此處までござれ甘酒進じやうといふと申されし、とあり。

志は笹の葉につゝめ

志とは禮物のこと、笹の葉とはすこしのこと、すこしの禮なりとも禮をすべきことにはせよとの意。

心無しのかつたゐ

人を罵りていふ語、この能取は日も得はからぬかたゐなりけり、などいふことあり、かつたゐとはかたゐのことにて乞食といふに同じ。

心の駒に手綱ゆるすな

古歌に

ひかれなはあしき道にも入りぬべし心の駒にたづなゆるすな

とあり、心を勝手氣儘にするときは邪の道に入ることあれば、心を制することを怠るなかれとの意。

心はその面の如し

人の心の同じからざるは、その人の面の異なるが如しとの義。

心は二つ身は一つ

思ふことが二つありて一方を爲せば一方を廢せざるべからざるをいふ

心無しの人うらみ

荀子に、心如二虎狼一、行如二禽獸一、而又惡三人之賊一已也、

とあり、己れの心の非なるを顧みずして、却つて人の己れを非とするものをうらむとのことなり。

心の鬼が身を責むる

佛祖より出づ、一念がよこしまなるときは、その心が惡鬼羅刹となつてわが身を責むるとの義、古歌にも

世の中の人は知らねどとがあれば我身を責むるわが心かな。

おそろしきおにの栖家をたづぬれば邪見の人の胸にこそすめ。

などあり、これも同じ意なり。

子供の喧嘩に親が出る

子供同士の喧嘩からその親に關係がつくとの意。

子供は風の子

子供は風や日にあはせて暖く衣せるなとの義なり、ある書に左のとあり。

ある人申されけるは、わらべを風の子と申すは何と申したることゝ不審しければ、こざかしきもの申すやう、フウフの間の子なれば、風の子といふとこたへた云々

可笑ともをかし。

子は三界の首枷

佛書より出でしこと、子が首かせとなり生死を脱離する能はずとの義、親が子に對する恩愛の情深きをいふ。

子は夫婦のかすがひ

夫婦離縁せんとしても子に引かされて添ひとけるより、子は両方の親をはなれぬやうにするかすがいである との義なり。

子故の闇に迷ふ

後撰集の雜の歌に

人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかな

とあり、子の愛情におぼるゝときは、その子に悪行ありとも知らずに闇の夜に方向に迷ふが如しとの義、大學にも、人莫レ知二其子之悪一とありこれも同じ。

子を以て知る親の恩

子を持つて親となり、はじめてわが親が苦勞してわれを育てたまひし恩の深きことを知れりとの義、傳燈錄にもあり、又貧然草にも、孝養の心なきものも、子もちてこそ親のこゝろざしは思ひ知るなれ、とあり、いづれも同じ意なり。

子を知るは親に如かず

日夜親しくその子の様子を見て居るから、子のことを知るは到底他人お及ぶところでないとの義なり、左傳に、揮レ子莫レ如レ父とあり、管子に知レ子莫レ如レ父とあり、又子を視る親に如かずといふも同じなり。

子持ちの腹へ馬のくつ

乳のみ子ある婦人の大食することをいひしなり。

子をなしても女に心をゆるすな

七人の子をなしても女に心ゆるすなといふに同じ、夫婦になつて子をまうけしとて女の親心はゆだんがならぬものとの意。

子寶脛が細る

子を多く生むと、その養育のために身代が細るとの意。

子を棄つる藪はあれど身を捨つる藪はなし

子を棄つるとは娘を嫁に、男の子を養子にやることをいひ、娘や男の子は養つてくるゝ養父はあれど年老つた親を世話してくるゝ人はないとの意、やぶとは養父との意なるべし、金藪梨に身にまさるものなかりけりみどり子はやらんかたなく悲しけれどもといへり。

小馬の朝駈

駒に朝は勢よく走れどすぐ疲るゝものなり、何事も初めに全力を出して中途でたふるゝものをいふ。

小坊主に天狗八人

小坊主一人に八人の天狗が溢ふとの意にて、何でも無いことに世話をや

くものゝ多きをいふ。

小舟の宵ごしらへ

手廻のよすがたことをいふ。

小娘と小蠶 大学生と大蠶裝

小蠶は子宮にかけて何時子をはらむも知れずとの意、小娘は親の知らぬ間に男子と情を通ずることあるより、油斷がならぬとのことにいたしなり。

木陰に臥するものは枝を手折らず

憐愍にそむかぬといふことなり、時外傳に、食二其食一者、不レ毀二其器一、陰二其樹一者、不レ折二其枝一とあるにもとづく。

吳牛月に喘ぐが如し

人のおそるゝことの甚だしきをいふ、吳牛とは水牛なり、この牛熱をおそるゝが故に月を見ても日と思へてあへぐとの意。

小刀細工

瑣屑たる小策をいふ。

吳下の阿蒙にあらず

吳志に見ゆ、いつまでも役に立ぬものではない、修行をされば變つたものにもなるとの意、

ころげても徒手では起きぬ

むさぼりて鑒くことを知らぬものゝことをいふ、史記に貨殖傳に、俛して拾ふあり仰いで取るあり といふに同じ。

此鬼も手洗ふ手水鉢

落客の常言、こゝに手があるであらうといふことなり、酷呂の拍子よりいひし言。

乞食に貧乏なし

乞食より零落すること能はず、この上はないとの義。

小姑一人は鬼千疋にむかふ

夫の姉妹を小姑といひ、嫁のきらふものにて、一人が鬼千疋にあたるほどにいやらしとの意。

乞食のお粥

言ふばかりにて實行せぬことをいふ、言ふばかり、湯ばかりと通はせたるなり。

腰巾着

人につきまとふことをいふ。

乞食を三日すれば止められぬ

いやしい事の却つて樂しく、人に厭はるゝことの却つて好まるゝを云ふ。

五十歩百歩

孟子に見ゆ、畢竟同じことにて、格別の相違なきをいふ。

胡椒の丸呑のやう

書物を讀むに、熟讀玩味せず、意理をかみくだかざるをいふ 朱子語類に見ゆ。

疑ては思案にあたはず

甚しく物事に凝り固まるときは、却つて思慮を失ふとの意。

こそ〳〵三里

こそ〳〵とは私語するといふに同じ、小き壁にて語るも遠きところまで聞ゆるとのこと、文子に、附耳之語、流聞二千里一とあるにもとづく。

胡蝶の夢

この世の果敢なきをいふ、莊子に、莊周夢爲二胡蝶一、栩々然不レ知下周之夢爲二胡蝶一、胡蝶之夢爲二レ周とあり、又堀川百首に。

百とせの花に宿りて過しても、この世は蝶のゆめにぞありける

今年は南瓜のあたり年

醜婦の嫁入すること多きをいふ。

辞多ければ品少し

口數の多きものは、威儀の品少なきものとの義、源氏河海抄に出づ、

草根集に

ほとゝぎす人も詞の多かるは、品少しときたぞまうせぬ

琴柱に膠

物事の變通を知らぬにたとふ、史記の藺相如傳に、若二膠レ柱而鼓一レ瑟耳とあり。

粉糠三合持つたらば養子に行くな

養子に行くは男子獨立の旨趣にあらず、すこしでも吾身に屬する資財あらば養子となるなとの意。

胡馬北風に嘶く

人の故郷を慕ふにたとふ、古時に胡馬嘶二北風一、越鳥巣二南枝一とあるに本づく。

戀の山には孔子のたれ

戀愛のためには、孔子の如き聖人も身をあやまるとの意、のたれ とは のたれ死することをいひしなり。

紺屋の白袴

説苑に、良醫之子、多死二於病一とあり、骨董集に「わらにふる雪や紺屋の白袴」といふ句あり、人の爲にして吾ためにせざるにたとふ、又いつでも出來ると思ひて遂に爲さでやむ事にもいふ。

ころばぬ前の杖

潛夫論に、發レ疾之、先レ病、服レ藥とあり、何事でも前か

ら用意しておけば失敗せぬものとの意。

これに懲りず道西坊

道西坊といふには意味なし、たゞこれに懲りよとの意。

紺屋の明後日

堀川狂歌集に、

こひごろもそむる紺屋の片思ひ、あさて〳〵といふばかりにて

とあり、又吾吟我集に、

つれもなき人はこんやのあすあさてあひそめん日を延々にする

ともあり、兎角ともこの諺は約束したる期日のあてにならぬこと、又はのび〳〵になることをいふ。

蒟蒻の木のぼり

ぶるくふるひ居る謎なり。

ごまめのはぎしり

ごまめは小魚なり、微力なるもの、切齒扼腕するも用聖なきをいふ

胡麻摺る

狡猾なる所爲をいふ。

戀は仕勝

未廣十二段に、戀は仕勝じや手ばしから但一飛にゆかつしやれ。

恐い物見たし

おそろしと思ふ物を見んとするが人の常猜なりとの戯。

戀に上下の差別なし

身分の尊いものが卑しきものを慕ひ、身分の卑しきものが尊きものを蔑ふなど、身分の階級なきをいふ。

氷に鏤み水に畫く

勞して功なきをいふ、山谷集に、鏤レ氷文章畫二工巧一とあり。

芥溜に鶴

物の不調和なることにいふ、芥溜はきたなきもの、鶴は奇麗なるものなればなり。

戀の病に藥なし

戀のために病氣となりしものは醫藥では治すべからずとの意、職人盡歌合に

あはれわが戀の病ひくすりなき、うき名ばかりを立ちものにして

言葉は身の文

言葉の品がよければ、その人の品もよく見ゆる　との義、國語定本に、蔵氏曰、　言身之文也と。

白痴はど恐いものはない

思慮なきものを白痴といふ、如何なる無分別なことをするか測られぬといふの意。

五位鷺の嫁入り

朝行つて暁に歸り來るとの意。

この奥に目あり

目のくぼんだ人を指していふ。

（俗語）

言語道斷

法華經より出づ、言葉に出して言ふべきやうもなきこと

朱子陸象山の事を稱して、言語道斷、心思路絶といへり、言ふを要せずとの意。

御無理御尤

表面にては從ひて、腹の中にて誹ることをいふ。

金輪際

地のはなのこと、君父の仇は――ゆるされず　などいへり。

乞食根性

人のものを欲しがるものをいふ。他より貰ふことを知つて人に物を與ふることを知らざるもの。

三枚目

腰巾着

人につきまとふとの意。

後生大事

死んでから後の冥福を得んがために、生前によきことを勉むるをいふ。

五七の雨

五七とは、むかしの五つ時と七つ時とのことなり、五つ

とは今の午前八時と午後の八時、せつとは四時にある、この時刻に地震すると雨が降るとのいひなり。

炬燵辨慶　うち辨慶といふに同じ、(ウ)の部を見よ。

木葉武士　木の葉の如く役にたゝぬ武士との義、これより轉じて人をいやしむにもいふ、よく新聞などに黄葉記者といふことあるはこれより轉じたるなり。

戀の歌　人を戀ふよりして遂に歌をよむに至るとの義、蜜蜂子の説に、人於レ色不レ能レ無レ思、其及レ思レ之、寤寐反側不レ忘レ之、則發二之言一、爲二和歌一也云々とありし。

アロマ

護摩の灰　小ぬすびとのことをいふ。

(イ)　(ロ)

榮耀に餅の皮をむく　事文類聚に、鄭滓といふ人儉素を以て自ら居る、河南に尹たり、甥を召してこれと會食す、蒸餅あり、鄭孫(甥の名)その皮を去つて後ちこれを食ふ、滓大に嗟き怒りて曰く、皮の中と何んぞ異ならんや、僕嘗て澆俗驕侈を病む云々と見ゆ。

枝を伐り根をからす　太平記に見ゆ、その子孫親族までも殺しつくすことをいふ。

追手に帆を上る　追手はエテと訓ずるなり、小町踊にてに帆の船やすゞみのもどりがけ

江戸つ子は五月の鯉のふきながし

口ばかりが大きくて腸のなきをいふ、この諺は狂歌より出しにて その下の句に、口さきばかりはらわたはなし」とあり。

鰍魚で鯛つる

王君玉雑纂に、將レ蝦釣レ鼈とあり、小資本にて大利を得るをいふ、又昔言故事に、人に物の薄きを送つて厚き報を得るを、投レ瓜得レ瑰とあり、これも意は同じ。

椽の下の舞

犬子集に、椽の下の舞かや庭に飛ぶ胡蝶」とあり、晴だゝぬことをいふなり。

椽の下の筍

世に出ること能はざるをいふ。

鰍魚くたむくね

出所は詳ならず、戒めをやぶりしために、惡しき返報を得たるをいふ。

わせものゝ空笑ひ

笑ふべき心なきに、詐りて笑ひ顔するをいふ。

越後女に上州男

越後の女は美人が多く、上州の男は意氣があるといふ よりいひしものなり。

得たりかしこし

得意の場合をいふ。

燕雀何んぞ鴻鵠の志を知らんや

史記に見ゆ、大鳥の心は小鳥には分るものではないとの意。

椽の下の鍬づかひ

腰がのびぬとのなぞなり。

枝をならさぬ御代

四京雑記に見ゆ、董仲舒曰、大平之世、風不レ揺レ條と、小說の高砂にも見ねたり、世のよく治まることをいふ。

鰍魚やさゞゐではあるまいし

さうは輕蔑したものではあるまいとの意。

江戸と脊とは見たものがない

田舍のものが、江戸を知るもの、少いことをいひしにて、當時に此の

鴻鵠ノ誤カ？ 勿論 バカ!!

知きは少なし

（て）

天下は天ドの天下

六韜に、太公曰、天下非二一人之天下一乃天下之天下也とあり、駿臺雜話に、天下は天下の天下、一人の下にあらずといふことは六韜の明にいでゝ、天下の君たる人は常に忘るまじきことにて候とあり。

天子に父母なし

一天萬乘の君は、尊き至尊の義なり、天智天皇の言に、天子に父母なしといへり、天子とは天の子と書くとあり。

天の與ふるを取らざれば、却てそのとがを受く

史記の陳餘の傳に、天與不レ取、反受二其咎一とあり、これ本づくならん。

天知る地知る

後漢書にいふ、楊震東萊の太守となる、道に昌邑を經たり、震は初め荊州たるときに茂才の王密を舉たり、密は時に昌邑の令となる、夜に至り黄金十斤を懷にして震に遺れり、震のいふ故人は君を知れるに君の故人を知らざるは何ぞや、密曰く、暮夜にして知るもの無しと、震曰く、天知る地知る子知る我知る、何んぞ知る無しと謂はんと、密愧て去れりと、これを楊震の四知といふ。

天から横に降る雨はなし

日蓮上人の歌に

心から横さまに降る雨はあらじ、風こそよるのまどはうつらぬ

と、人の性は善にしてはじめより横道凶惡なるものにはあらずとのことをいひしなり。

天の網にかゝる

老子に、天網恢々疎而不レ漏とあり、天のあみはおほまかなものゝやうであるが、それでもとり逃すものではないとの意。

天にあらば比翼鳥　地にあらば連理の枝

白氏文集の長恨歌にあり、比翼連理のところに綿し、ひゝの部を參看すべし。

天はものいはねど指圖する

孟子に、天不レ言、以二行與事一示レ之而已矣とあり、天に

口なし人をもつていはしむといふと同じ。

手のうらをかへす

孟子に、 以レ齊王、由レ反レ手 とあり、たやすきことをいふ。

貞女両夫にまみへず

說苑に、王燭曰、忠臣不レ事二君一、貞女不レ更二夫一 とあり、意はおのづから明かならん。 訳サスヒハ不解

手の舞足の踏むことを知らず

樂記に見ゆ、うれしきことのたとひ。

手に汗握る

投筆雜記に、今也人旁二觀人涉レ險而躋者一、輙二、爲レ爾捻二兩把汗一 とあやぶんで一人で力を入ることをいふ。

手なくして寶の山に入る

大論に、信爲レ手、無レ信如レ無レ手 無レ手人、入二寶山中一、則不レ能レ有レ所レ取とあり、眼前に取るべきものゝありながら、手が入るゝことのならざるにたとふ。

手習は坂に車を推す如し

家康の歌に

ならひは阪に車をおすごとし、ゆだんをすればあとへもどるぞ

とあるに本づく、油斷すべからずとの意。

手遠いものはまさかの時の役に立たぬ

明心寶鑑に、遠水難レ救二近火一、遠親不レ如二近隣一とあり この諺の意に同じ。

寺から里へ

興ふべきものが、興へらるゝものより反對に進物をうくるをいふ。

敵は本能寺にあり

わが目的の要旨は彼にあらずして此にあるにいふ、明智光秀の故事

よりいふ。

敵を射んとするものは先づ馬を射よ

主人に説かんとするには、先づその妻に説けとの意。

亭主を尻にしく

婦人がその夫人に柔順ならずして、夫を無ものがほにすることを

いふ。

行誠上人が、ある女史の繪畫詩歌にたくみなるに示したる歌に

歌をよみ女房などはもたぬもの、亭主をしりにしき島のみち

とあり、この詩よりいひしなり。

鄭家の奴は詩をうたふ

事文類聚に見ゆ、これも勤學院の雀と同じ意なり(〜)の部を看よ。

鳥雀枝の深にあつまる

杜子美の詩にあり、仁心ある君には人のつゝもの多しとの意。

出る杭はうたる

古き狂歌に

さし出たる鋒先ををれいくたびも、おのが心を金槌にして

とあり、人のさし出過ぎたるをいましむるなり。

提灯につりがね　羊丸の意

不釣合のことをいひしなり。

天秤にかける

事を両端にかまへることをいふ。

手ですることを足でする

宜しく爲すべきものを以て爲さずして、爲すべからざるものを以て爲すことをいふ。

天道人を殺さず

全く死すべかりし場合に、忽ち幸を得てたすかりしをいふ、又水旱虫害の如き、天の作せる禍ひはなほ避くべきをいふ。

手も足も出ぬ

いかにとも詮方なきことをいふ。

提燈を借りた恩は知れど天道の恩はわすれる

小き提燈ほどの恩は知れども、大なる日月ほどの恩はよく忘るゝといふの意。

（あ）

朱を奪ふ紫

論語に、惡二紫之奪一レ朱也、惡二鄭聲之亂一レ雅樂也とあり、そしりのあるものがまじりなきをみだすことにいふ。

惡事千里

事文類聚に、好事不レ出レ門、惡事傳二千里一とあり、わるいことは早く遠くにまでつたはるとの意。

愛立てないは親の育ち

書經に、愛レ親、とあり、源氏蜻の巻にも、愛たてなき御子とあり、祖母に養育せらるゝ子は、恩愛の情うすきものとの意。

足元のあかるい中に

手おくれとならぬ中に、思ひきつて處置せよとの意、應筑波といふに足もとのあかい時たてかもの島とあり。

あつものにこりてしたし物を吹く

唐書の傳奕の傳に、懲二沸羹一者一、吹二冷齏一、傷弓ノ鳥驚二曲木一とあり、黒犬にくはれて灰の和泮に怯る（くの部）を參看せよ。

鮑の貝の片おもひ

俊成の歌に

なみかゝる岩根につけるあはび貝、こやかた戀のたゞひなるらん

とあり、意味のすから明かなり。フラレタリヤ

甘いものに蟻がつく

利のあるところに人の群るをいふ。

網もやぶらず魚も漏さず

圓滿なる所爲のたとへ。

足を重ね目を爪つ

漢書に、使二天下重レ足而立、爪レ目而視一とあり、おそれるかたちをいふ。

逢ふば別れのはじめ

白氏文集に、合者離之始、樂兮憂所レ伏とあり、又

佛書に會者定離といふあり、これに本づく。

あたらずといへども遠からず

大學に、心誠求レ之、雖レ不レ中不レ遠とあり、似よりしをいふ。

あたつて碎けろ

小町踊に、春の日のあたつてくだく氷かな」とありたとへ失敗するとも進んでその事業をこゝろみよとの義。

足もとから鳥

事の突然におとる場合にいふ。

麻につるゝ蓬

荀子勸學篇に、蓬生二麻中一不レ扶而直とあり、慈鎮和尚の歌にも。

人の來てみちびく野邊にいでぬれば淵の中なる蓬なりけり

とあり、よき友に交はればおのづと良くなるなどにいふ。

惡をすれば淵に入る

法苑珠林に、爲レ善生レ天、爲レ惡入レ淵とあり、わるいことをするものは、うかむことかないとの意。

商は牛のよだれ

商法は氣長く、ねばくすべしとの意より、牛の涎のねばくして長きが如くすとせしなり。

秋茄子嫁に食はすな

世事百談に、秋なすび、わさびの汁につけまぜて、よめにはくれじたな

におくとも」といふ歌は、よめとは鼠のことにて、鼠をよめ又は嫁の君ともいふ。

生々篇に、茄子性寒利、多食必腹痛下痢、人能傷二子宮一とあり、この意を、孫の顔見たらゆるさん秋茄子」といふ句あり、秋茄子は味が美なるゆゑ、姑がおしんで嫁に食はさぬといふ謂あれど、生々篇の謂を終りとするが如し。

欠伸は人にうつる

枕草子に、みならひするもの、あくびちごども云々とあり、又京羽二重に、うつすべき欠伸は秋の友もなし」とあり。

頤で蠅逐ふ

腎虚といふ病のために頤のやせやつれたるをいふ。

朝寐の宵まどひ

説苑に、喜二夜臥一者、不レ能二蚤起一とあり、夜をふかすものは朝寐するとの意。

足をそらにす

源氏に、足をそらに誰もくるかで來たまひぬ云々とあり、夢中になりて走ることをいふ。

當鍵なしに左官はできぬ

目的なくしては、何事も成就すべきものにあらずとの意。

仰いで唾はく

四十二章經に、惡人欲レ害二賢者一仰レ天而唾、唾不レ汚レ天、還二汚二己面一とあり、人を害せんとして、却つ

て自ら害を受ることをいふ。

過つては改るにはゞかるなかれ

論語に、過則勿レ憚レ改とあり、意はおのゴから明か。

青は藍より出でゝ藍よりも青し

荀子の勧學篇に、青出二之於一レ藍而青レ於レ藍とあり、弟子の師匠よりよくなるものにいふ、出藍とはこれより取りしなり。

網の目より目が出る

望む人の澤山にあることをいふ。

阿房の鼻毛で蜻蛉つながる

どんぼうの身こそ、彼には稍ならぶらめど、糸につながれ、獄にさゝれ、童の玩びとなるだに苦しきを、阿房の鼻毛につながるゝとは、

いと口惜しきかなと、也有百虫譜といふに出づ。

あたま隠して尻かくさず

百喩經に、むかし愚人ありていふ、わが父はわかきより淫欲を斷ち、はじめより汚れしことなしと、衆人のいふ、先ゴ淫慾をたちしならばなんとて汝を生しぞとて、深く世人に笑はれしと。

朝日ののぼる勢

詩經に、如二月之恒一、如二日之昇一とあり、勢のつよきことを云ふ、日の出の勢といふも同じ。

朝起きは三文の徳

早起三朝當二一三一といふ句あり、三日朝起きすれば、一日の仕事にあたるとの意なり、三文の徳とは出所を詳にせず。

惡につよければ善にも強し

既に、惡二惡道一不レ能レ甚則、其好二善道一亦不レ能レ甚とあり、意思の強きをいふ。

挨拶は時の氏神

爭論するときに、仲裁する人のあるは、時にとつての氏神ほどに、うれしきものとの意。

商人と屏風とは曲らねば世に立たず

靡筑波に、すぐではたゝぬ世の中ぞかしといふ句に

商人の屏風にしのしつらひて

とあるによる。

阿漕が浦の引網も度かさなれば顯はるゝ

六帖に

逢ふことのあこぎが浦にひく網のたび重ならば人も知るらん

とあり、度かさなるといふの意。

朝比奈と頸引

力のおよばざること、到底敵すること能はざるにいふ。

あだは恩で報ねよ

老子に、大小多少、報レ怨以レ德といひ、又古人の句に

手折るゝ袖ににほふや梅の花

といふあり、うらみにむくゆるに德を以てせよとの意。

あたら口に風ひかす

あたらとは可惜の字を用ゆ、言ひ出してむだになりしことをいふ。

危ひところに上らねば熟柿はくへぬ

虎穴に入らざれば虎子を得ずといふに同じ、甘いことをせんとならば、それだけ危險もおかさねばならぬとの意。

飴ねぶらする

大學衍義に、喟以二甘言一而陰陷レ之とあり、人を害せんとして、口には甘言を交ることをいふ、又甘いものを食はせて、引きつけることにもいふ。

蟻の穴から堤がくづる

韓非子に、千丈之堤、以二螻蟻之穴一潰とあり、小さいことから大やぶれになることをいふ。

尼御前の紅

濃筑波に見ゆ、世捨人たる尼が、口紅をすといふことにて、不似合のことにいふ。

穴あらば入りたき心

賈子の審術より出つる語、心の中にふかく愧ぢたることをいふ。

頭剃らんより心それ

鴨長明の歌に

そりたきは心の中のみだれがみ、つむりのかみはとにもかくにも

とあり、意は明かならん。

足駄片足に草履片足

物の調和をかくことにいふ。

足駄穿いて首つたけ

魅にこがるゝ心のふかきをいふ。

朝顔は一日の榮

槿花　朝榮といふ詩の句あり、わづかの間榮ゆるにたとふ、源平盛衰記に見ゆ。

飽くまで食つて寢ると牛になる

嬉遊笑覽に見にたり、小兒に食後すぐに寢てはならぬといましむるにいふ。

赤い信女の木魚講

寡婦郎ち後家の懷妊することをいふ、木魚とは腹のふくらんだことをいふ、「赤い信女が子を孕む」といふも同じ、赤い信女とは、夫の石碑におのれの戒名も共に刻んで、その赤だ死せざる間は、赤い色が

入れてあるからいふなり。

秋の日は釣瓶おとし

秋の日の短くしてくるゝことのはやきをいふ。

あけて悔しき玉手箱

謡曲の浦島に、身に白露の玉手箱、あけてくやしき心かな云々とあり、豫想したることの失望となりしことをいふ。

淺き川も深く渡れ

何事にも愼重にせよとの戒。

網代の魚

ぬがれがたき運命といふ戒。

後は野となれ山となれ

今さへよくは、後のことには頓着せぬとの意。

痘痕も笑靨

わが嬪しとおもふ人は、その面のあばたも笑靨に見ゆるとの譬。

網なくて淵な臨みぞ

抱朴子に、不レ學而求レ知、猶二顧レ魚而無一レ網焉とあり、其法を知らずして事物を欲望するをいふ。

あらい風にもあてぬやうに

子を愛すること深くして、大事に養育し、みだりに外へも出さぬことをいふ。

あひるが文庫を脊負つたやう

しりの高きを形容せし詞。

あひるの火事見舞

女のあるきぶりの不恰好なることをいふ。

あひるの脚半

短きものゝ形容にいふ。

あひるの道中

胸と尻とをさし出して、内わにあるく女のことをいふ。

彼の聲で蜥蜴食ふかほとゝぎす

見かけによらぬ惡しきことをいふ。

明日ありとおもふ心の仇ざくら

一休の歌に

あすありと思ふこゝろのあだ櫻　よはにあらしの吹かぬものかは

とあり、人生の無常をいふ。

足なへ立つことを忘れず

漢書の韓王信の傳に、僕之思レ歸、如二瘦人不一レ忘レ起、盲者不一レ忘レ視とあり、意はおのゴから明かなり。

朝雨は女のうでまくり

朝雨は、はげしきものにあらず、おそるゝに足らずといふの意、晩雨は女がはたらくことにいふ。

赤子の手を捩るやう

力なきものを苦しむるの意、又いと容易なるの意。

あげ足をとる

人の失言をとらへて攻撃することにいふ。

あげ句のはて

百韻の最終の句をあげ句といふより出でしものにて、終局にはとの意にいふ。

朝虹に川渡すな、夕虹には傘をもつな

壺書錄に、諺にいふ、朝虹不レ渡レ川、晩虹不レ齎レ傘といふありと、晩の虹には晴れ、朝の虹のたつときは、晴れぬといふの語。

明日の百より今の五十

手っ取りばやいが得なりとの意。

彼方立つれば此方がたゝぬ

あちら立つれば此方がたゝぬ、両方立つれば身がたゝぬといふことあり

これより出でし諺なり。

惡鏡身につかず

大學に、言悖而出者、亦悖而入、貨悖而入者、亦悖而出とあり、不正の財は忽ちに失ふといふの意。

惡事身にとゞまる

春秋傳に、惡レ惡止ニ其身一、善レ善及ニ子孫一とあり、意はおのゴから明かならん。

惡女は鏡をうらむ

二程全書に、明鏡爲ニ醜女一とあり、おのれの影のみにくゝうつるよりいふ。

朝飯前の茶漬

なんの造作もなきことをいふ。

合はぬ蓋あれば合ふ蓋あり

心の合ふものと、心の合はぬものとあれば、何事をするにもそのゆすべしとの意。

相手かはれど主變らず

一人にて衆人に應接することをいふ。

開いた口が塞がらぬ

呆れはてたることをいふ、出所を詳にせず。

有るはなく無きは數添ふ

藤原爲頼の歌に

一世の中にあらましかはと思ふ人、なきが多くもなりまさるかな

油蟲きて火消ゆ

涅槃經に、如二燈油盡一而滅則滅一、衆生愛盡即見二佛性一とあり、意は明かなり。

呆れかへるの頬かぶり

あきれかへるといふの意、かへるは蛙と通じて頬冠といひしまでにて何の意味もなきなり。

雨降つて地固る

騒擾たび鎮まりし後は、以前よりも一段と無事にかたくなるといふの意、爭論せしものなどに多く用ふ。

危きこと累卵の如し

累卵之危といふことあり、卵子をつみかさねしが如く、危險なることをいふ。

あて事とふんどし

世事の齟齬しやすきことをいふ、向ふより外るゝの意。

あだし野の露、鳥邊の煙

人生のはかなきをいふ、徒然草に出づ。

虻蜂とらず

彼も失ひ、是も失なふことをいふ。

頭の上で小便する

甚だしく人を輕蔑することにいふ。

（俗語）

秋の扇

室町千疊敷に、何故に我に秋の扇を捨てられて」とあり、すてらるゝの意。

あくぞもくぞ　人のあらをいふこと、あくたもくたより轉じたるにて、芥滓屑の義なり。

頤の栗　口に入らぬといふなぞなり。

朝腹　朝飯前のことをいふ

あでこすり　人の心にあてゝ誹ることをいふ、娘容儀に、女の性はいひ合はさねど、いゴくも同じこと、内儀へ耳こすりいふて云々とあり、同じ義なり。

後の祭　時機のおくれたることをいふ。

あんぽんたん　阿房といふことを洒落たるものにして、丹とは千金丹、萬金丹などいふ丹と同じ。

合縁奇縁　男女の互に氣質の合ひて、夫婦の縁をむすびしものをいふ。

青二歳　歳のわかくして未だ世事になれざるものをいふ。

あきめくら　文字を知らぬものをいふ、文盲の字を用ふ。

赤の他人　全く縁のなき人をいふ。

主關白　主人の傲慢なることをいふ。

（さ）

三人寄れば文珠の智慧

三人相會して相談するときは、文珠にも劣らぬ智慧がでるとの意。

論語に、三人行、必有二吾師一焉、とあり。

三十六計逃るを上計とす

戰語要に、三十六計、逃爲二上策一とあり、にぐるが近道上分

別との意、に)の部參看すべし。

猿も木から落る

名人にもあやまちのあるをいふ、弘法にも筆のあやまりと同じ意。

酒がなくなれば水を飲む

蘇東波の詩に、有レ酒醉不レ辞、無レ酒斯飲レ水とあり、これに本づく。

酒醉本性たがへぬ

酒に醉ひつぶれしものにても、恐るべきこと、慎むべきことなどあればぶ忘れぬものとの意。

猿に烏帽子

人にして衣冠をつけたりとも、心は畜生の如くに無道なりとの意。

漢書に、楚人沐猴而冠とあり

座して食へば山も空し

働ずして食へば、如何なる富を有するも遂に空しくなるとの戒。

酒は飲むべし、飲むべからず

酒は適度に飲み亂に及ぶなかれとの意。

去るものは日々に疎し

人は死裏にあへば寢食を忘るゝまでに傷みかなしめども、日月の經過するに隨ひて、その念おのづから減ずるをいふ。

竿のさきに鈴

見るもの聞くものにつけ、用にも立たぬことをいふのみにて、實にもと思ふことの霑ばかりもなきをいふ。

障らぬ神に祟なし

鬼神を敬してこれを遠ざくるの意。

山椒は小粒でも辛い

體は小なりといへども、材能ある人は侮るべからざるをいふ。

さうは問屋でおろさぬ

言ふべくして行ふ能はざるをいふ。

先んずれば人を制す

史記の項羽の際に見ゆ、人に先だちて事を處理すれば、人を拘束することを得との意。

昨日の少年今日の白頭

いつまでも若くては居らぬとの意。

咲きも揃はず、散もはじめぬ

今が花の見頃であるとの意。

よく形容を面白くいひしなり。

細工は流々仕上げを見よ

流儀は異なるとも、その出來榮の如何に注目せよとの意。

（き）

機を見て作つ

易の繫辭に、見レ機而作、不レ俟二時日一とあり、いつといふ日を限るに及ばず、時機の來るを見て事をなせよとの意。

木によりて魚を求む

孟子に、緣レ木而求レ魚云々とあり、思ふて得べからざることをいふ

金言耳に逆ふ

良藥甘於口、諫言逆二於耳一 とあるにもとづく、金言は諫言といふが如し。

君は舟臣は水

荀子に、君者舟也、庶人者水也、水則載レ舟、水則覆レ舟 とあり、君は民の心を得ざれば、安んずる能はざるをいふ。

君君たれば臣臣たり

論語に、君爲レ君、臣爲レ臣とあり、君が君たるの道をつくせば、臣も臣たるの道をつくすとの意。

昨日にかはる今日の淵

古歌の飛鳥川の下の句に「きのふの淵はけふの瀬となる」とあり、世間の常に變移するをいふ。

聞くは一時の恥　知らぬは末代の恥

問ふは一時の恥、問はぬは一期の恥といふに同じ、（と）の部を見よ。

九牛の一毛

極めて微少なるをいふ。

（ゆ）

勇將の下に弱卒なし

首領たるもの勇氣に富めば、その部下に弱き兵卒なしとの戯、孫子に勇將手下無二弱兵一 とあり。

幽靈の濱風

幽靈が濱風にあひし如く、いつといふことなしにその姿を隱すを

いふ。

往がけの駄賃

己れ去らんとするときに、何事かあしきことをするをいふ。

湯の辭儀は水になる

入湯のとき、互に譲り合ふ間に、湯がさめて氷となるとの義にて譲るべからざることを譲るをいふ、薩摩歌に「あほうな醫酢しすごして湯の辭儀は水になる」と云へり。

夕立は馬の脊わける

夕立は一つ村にても降るところもあり、降らぬところもあり、馬上にても左は雨、右は晴とことにすることありとの義なり、樹博物志に、俗に五月雨を以て分龍雨となり、一に隔轍雨ともいふ、夏月に降るを

分龍雨といふは、夏雨は龍の行ふ所にして、或は一村一郷を隔てゝ降らす、故に隔轍雨ともいふ、車の轍を隔つるほどにて、降り降らぬ所あるをいふ、分龍雨は所謂夕立雨なり。

夢の浮橋

名のみにて實物なし、夢の中の通ひ路をいふ、古歌に

おもかげは見しを限りの途絶にて逢ふ夜むなしきゆめの浮橋

湯を沸かして水にする

折角したことの功を奏せざることにいふ。

夢に牡丹餅

おもはぬ喜びあるにいふ。

湯とも成らず水とも成らず

方針のたゝぬことをいふ、京みやげに、母が身にあるそのうちに渇とも水とも成りはせで、とあり。

勇士は轡の音に目をさます

常に寸分の油斷なく、武道に心がけある武士は、轡の鳴る音を聞いても目をさまして起るとの戯なり。

雪は犬の伯母さん

犬は雪をよろこぶものゆゑにいひしなり。

百合若大臣のやう

百合若物語に、相傳ふ九州に人あり、名は百合なるもの、性睡を貪むし、或は三日三夜もさめずとあり、睡を嗜むをいふ。

夢は逆夢

惡しき夢を見たるときは反對に判斷せよとの戯。

弓は挽人であたる

弓の善惡によらず、ひく人の技術によるとの戯、一弓も挽人、相撲立たかた一といふも同じ。

雪といふ字を墨でかく

赤き心を墨でかくといふに同じ。

（俗語）

雪と炭

性質の反對してあること、又は何事に限らず、非常に相違せしことにいふ。

油斷大敵

油斷とは心のゆるみて注意を怠ることをいふ、涅槃經に見えたり、油斷は大敵の如く恐るべきものと心得て注意

すべしとの戒なり。道歌集に

油斷をば大敵なりと心得て堅固にまもれ己が心に

弓と絃　相違はなはだしきをいふ、一方は弓の如くにまがり、一方は絃の如くに直なるをいふ。

夢に夢見し心地　うつらしと、何が何やらわからぬ心地であるとをいふなり。

夢は三日　薩摩歌に、よいにつけ、あるいにつけ、夢は三日が大事のもの。

（め）

冥途の旅の一里塚

一休の歌に

門松は冥途のたびの一里ゾか、めでたくもありめでたくもなし。

名物に旨いものなし　名高きもの、却つて評判ほどになきをいふ。

目から鼻へぬける　怜悧機敏なるをいふ。

盲人に鏡をおくるやう　韓非子に、勿レ胎二盲者鏡一とあり、用に立つものにて、使用する能はざるものに與へては役に立たぬにいふ。

盲人のかきのぞき　維摩經に、如二盲者見一レ色とあり、その効なきをいふ。

盲人蛇におぢず

古歌に

ふみあてはめくらもへびにおづべきか　知らねば易き和歌の道哉

とあり、怖るべきことにもおそるゝことなしとの義なり。

目の上の瘤

邪魔になるものとの義。

牝鶏うたへば家ほろぶ

周書に、牝鶏之晨、惟家之索とあり、妻たるものゝ、一家の権をほしひまゝにするときは、その家衰ふとの義なり。

目明千人盲人千人

物識もあれば、無識の人もあるとの義なり。

妻いとし子いとし

妻子の愛にひかさるゝをいふ。

（俗語）

目と鼻の間　極めて近きところの意。

面くらつた　びつくりすること、狼狽の態をいふ。

目もあや　すぐれて華麗なることをいふ。

盲人滅法　思ひきつたことをするをいふ。盲人滅相といふが正しかるべし。

（み）

木伊乃とりが木伊乃になる

遊所などに入りびたれる者を連れ帰らんとて使に遣れば、そのものも共に遊びて帰らざるが如きをいふ、閑窓瑣談にこのこと委しく載せた

れど長ければ略す。

身から出た錆

失敗災禍などにあふて惡結果を得るは、畢竟己れのつくりたる惡因にもとづくの義、書經に、天作孽猶可違、自作孽不可逭といふも同じ。

味噌をつけた

事を仕損じたるをいふ、太平記の桃井直常が敗軍のところに、唐はしや塩の小折のやきしこそ、桃井殿は鬼味噌をすれといふ落首あり。

身は身で通る

如何にしてなりとも、身分相當のことを暮し行くとの意。

容貌より心

人はその容貌より心の美しきがよしとの義、古今集の歌に

かたちこそみやまがくれの朽木なれ、心は花になさばなりなむ

身を摘みて人のいたさを知れ

己れの欲せざるところ人に施すなかれといふの意なり、慈鎮和尚の歌に

誰もみな我身をつみて思ふべし、命はをしきものと知らずや

大内義隆の室の歌に

身をつみて人のいたさぞ知られけるつま戀しきは戀しかるらむ

見るは法樂

見るばかりは無價なりとの義。

耳掻で集めて能手で掻き出すやう

少しづゝ集めて一時に多く散すことの意。

見ぬが佛聞かぬが花

他人の噂をきゝしとき其の事實を十分に見す聞かざるが奥ぶかしとの義なり。

美濃と近江の寝物語

犬子集に、寝物語に月ふかしぬる肌寒や秋にあふみの國さかひとあり。

りこれと同じ意なり。

盈れば虧く

人事榮枯盛衰あるを免れずとの義なり。

水も漏さぬ中

至極親密なる間柄とのこと、小町踊に

籠にさへ水をもらさぬ氷かな

水は方圓の器に從ふ

人は善惡の友によるとの意なり、荀子より出づ。

水の中で屁を放るやう

取りとめたる事なきを形容せしなり。

三つ鼎で談す

三人對談することをいふ、鼎は三本足なるよりいふなり。

水かけ論

爭論のいづれにも決せず、理非曲直を斷ぜずして放言のまゝに終るをいふ。

神輿をすゑる

人の容易に立ちあがる景色なきをいふ、坐りこむことなり。

三歳兒の根性百まで

幼時の氣質終身失せ去らざるをいふ。

光秀の天下

世に時めくことの短きをいふ、光秀の天下で三日坊ともいふ。

道草を食ふ

子供などが、道を行きながら遊びたはむれて暇どるをいふ。

水鳥くがに迷ふ

水鳥は水中にては自由におよげども、陸にありては自由を失ふものなり、途方にくるゝをいふ

水に油の交りたるやう

親しきものゝ中に、疎きものゝ交りしをいふ。

身をすてゝこそ浮む瀬もあれ

慾心を去らば却つて無事安樂なりとの義、花草紙に、ものゝふのやたけ心のひとすぢに、身をすてゝこそ浮ぶ瀬もあれ、とあり。

見られぬといふ程見たし

禁止せらるれば却つて反動を起しやすきことをいふ。

（俗語）

水の出花　一時盛にして直に衰ふること。

水呑百性　小作人をいふ。

三日坊主　物にあきやすきをいふ、又末のつゞかぬことにもいふ。

水臭ひ　潔、情にして冷淡なるをいふ。

味噌摺坊主　僧にして新水の勢をとるものゝことをいふ。

三行半　離縁狀のこと、他我身の上に、つひにその女房を三行半でらちをあけ云々とあり、宗因の句にも歸る雁三くだり半を名殘にて　などいへり。

三島暦　こまかなる喩にいふ。

見せびらかす　見せほこるの義なり。

水に流す　感情の行違をわすれ去ることをいふ。

水の月　月に見るのみにて手に取るあたはざるをいふ。

耳學問　人に聞いて物を識れるをいふ。

(し)

知らざるを知らずとせよ　論語に、知之爲レ知レ之、不レ知爲レ不レ知、是知也とあるに本づく　知らぬことは知つた顔をせぬものとのおしへなり。

知つて知らざれ　老子に、知不レ知上とあり、知つても知つた風をせぬをよしとするとの意。

四十二のふたつ兒　俗に男の四十二を厄といふ、四十二を略すれば四二とあり、死にと通ずるよりいひしなり、又四十二歳にて二歳の子あれば、父子の歳を合せて四十四歳となる、これを略すれば四四となりて四死と通ずるとい

ふより、むかしより御幣かつぎの忌しごとなり。

正直の頭に神やどる

倭姫世記に、日月雖レ照二六合一、須レ照二正直頂一

とあり、古歌に心だにまことの道にかなへば いのらずとても神や守らん

とあり、意はおのづから明かなり。

鹿見て矢はぐ

軍見て矢はぐといふに同じ、(い)の部を參看せよ。

鹿は射手の前に來る

家語に、好レ勝者必遇二其敵一とあると同意なり、意は明かならん。

下として上をはからふことなかれ

論語に、不レ在二其位一、不レ謀二其政一とあり。これより出でしことなり。

食なきものは職を擇ばず

飢者易レ爲レ食、渴者易レ爲レ飲といふに同じ、飢たるときは、何の職にてもいとはぬとの意。

麝香もかげば腦にはひる

瑣碎錄に、鹿茸、麝香、肉蓯蓉、切不レ可二就レ鼻聞一、蓋有二微虫一とあるに本づくならん。

七尺去つて師の影をふまず

普見論に、弟子從レ師行、不レ得二踏レ師七尺一とあり、又

沙彌威儀經に、弟子從レ師行、不レ得三以レ足踏二師影一とあり、弟子たるものは、師をうやまはねばならぬとの意。

柔よく剛を制す

易經に見ゆ、やはらかなるものが、よくつよきものを制するものとの意なり、老子及び三略にも見ゆ。

十遍さがして人を疑へ

なゝたびたゞねて人をうたがへといふに同じ、（な）の部の解を看るべし。

十遍讀まんより一遍寫せ

書物を十たび讀むよりは、一度寫した方が大に學力を添ふるものとの意なり、歌林玉露に見ゆ。

駟も舌に及ばず

論語に、駟不レ及レ舌とあり、いかに早き駟馬でも、舌のさきにはかなわぬとの意にて、一度口から出たことは、すぐに外にひろがるものといふにも用ふ。

尻くらひ觀音

しりくらひとは後暗との言葉の轉訛したるなり、六觀音の緣日を十八日より二十三日までにわりあて、その緣日の後は暗しといふことなりといへり、今はこの意味を轉じて、跡は野となれ山となれといふ意に用ふるなり。

四海兄弟

論語に、四海之内、皆兄弟也とあり、黃山谷の詩に、四海一家

皆兄弟とあり、道歌に

まことほど世にたふときものはなし、まことを一つで四海兄弟

とあり。

獅子は子を谷に落してその勢を見る

獅子は子を生んで三月にして、これを千仞の谷に擠してその勢のいかんを見るといふことなり。

舌三寸の轉に五尺の身をはたす

童子教に、車以二三寸轄一、遊二行千里之道一、人以二三寸舌一破二損五尺之身一とあり、これと意は同じ。

沈めば浮ぶ

浮沈の常なきことをいひしなり、異本保元物語に、爲朝、爲義を諫めて、世間のならひ心一様ならず、沈めは浮ぶの理あり云々とあり これと同じ。

四百四病の病より貧ほどつらいものはない

千金方の調氣法にいふ、百病不レ離二六臓一、共有二八十一種疾一、冷熱風氣、計成二四百四病一とあり、四百四病はあらゆる病氣といふの意にして、その病氣よりは貧が苦いものとの意。

身代に尾が見ゆる

八百屋お七の條にいふ、愁に目が光るやう、身代に尾が見ゆるやうと、身代のそこが知れるとの意。

上戸のひたひ盆の前

あつきことをいふ、民のかまどに。

酒のみのひたひにさめぬほとぼりは魂祭るころの前のあつさや

とあり、時候の暑さにいふことなり。

蛇の道はへび

大智度論にいふ、智人能知レ智、如三蛇知二蛇足一とあり、その道のものはよくその道のことを看破するといふの喩なり。

尻馬に乗る

人の説に雷同附和していふをいふ。

尻の毛まで抜かる

人のために馬鹿にされて、だまかさるゝをいふ。

白川夜船を漕ぐ

一に白川夜船の高鼾ともいふ、何れも居眠りすることをいふ白川とは何事もしらずに眠りこむといふにもじりしもの、夜船とは居睡してがくり〳〵と膝をうごかすは恰も櫓を漕ぐが如きよりいひしなり、小町踊に「雪の夜の月は白川夜船かな」とあり。

正直の儲は身につく

博多女郎浪枕に、栄大根肩においても、正直なまうけは三文でも身につくといひ聞せたことは反古にして云々とあり、正道によりて得たる利は身につくの意にして、悪銭身につかずの反對なり。

親は泣より他人は食ひより

李荷甫が望雲餘に、肉族以レ親泣二哀襄一、也家以レ疎會二酒樂一とあるに本づくならん、親しき一族のものは泣てその喪に集り、他人はたゞ酒食のために會するいとゞうとましきものとの意。

塩をふむ

毛吹草に、旅だちて雪のしぼふむ山路かな」といふことあり、辛き渡りしのべるをいふ。

死は鴻毛より輕し

史記の荊軻の傳に、死有レ重二於太山一、有レ輕二於鴻毛一とあるに本づく、時としては水鳥の毛よりも輕いほどに生命をすてることがあるとの意。

親しき中に垣をせよ

貞心雜言に、隣里欲レ高レ墻、親情欲二遠方一とあり、近くてあまりに親しきに過るときは、却つて爭ひの生ずることのあるものなれば斯くいひしなり。

死すべきときに死せざれば死にまさる恥あり

一の谷嫩軍記に、この文句あり、意はおのづから明かなり。

鹿つきの山は獵師知り魚つきの浦は網人知る

論衡に、魚鼈匿レ淵、漁者知二其源一、禽獸藏レ叢、獵者見二其孔一とあり。

すべての物事は專門によりて精通するものなりとの意なり。

鹿を追ふ獵師山を見ず

古語に、攫レ金者不レ見レ人、逐レ鹿者不レ見レ山とあり、列子の註に志は金を攫むにあつて其の人を見ず、是れ鹿を逐ふて太山を見ざるなり、言ふこゝろは、心に迷ふ所あつて此に至るなりと、欲に目を着けて世の道理を知らぬにたゝへしなり。

獅子食た報

女色におぼれて、遂に梅毒に感染するが如きをいふ。

七年の病に三年の艾を求むる如し

孟子に、今之欲レ王者、猶二七年之病一、求二三年之艾一也

とあり、到底得がたきことをいふ。

死ぬる子は容貌美し

菅原傳授手習鑑に、死ぬる子は容貌美しと、うつくしう生れたが、可愛やこの子の不仕合云々とあり。

十月の戸閉醫者

丹鉛錄に、批把黄、醫者忙、橘子黄、醫者藏、言二夏多レ疾、冬自平一也とあり、密柑が黄ばめば醫者が

育くなるといふと意は同じ。

人世は白駒の隙を過るが如し

史記に、魏豹曰、人生二一世間一、如二白駒過一レ隙耳とあり月日のだん〳〵と經過するをいふ。

醬油で煮しめたやう

白いもの〻色のつきしをいふ。

杓子定規

梅園叢書にいふ、物の直からむことを欲せば、準繩規矩を用意すべし、これをはさしおきて、杓子を取りて定規とせんには、千萬年を歷るとも、直ぐになるまじきなり、今の人惡しきを取り、身の過ちをおほふは、これぞ誠の杓子定規なるべしと、これは實地に運用するの妙を

知らざるをいふ。

尻も結ばぬ糸のやう

しめくゝりのなきことを形容せしなり。

蜀犬日に吠ゆ

蜀といふところは、山多くして日を見ること少し、故に日出れば群犬疑ひて吠ゆといふことあり、これによりて、未開人が文明人の爲ることをあやしみ驚くなどにいふ。

春情燃ゆ

詩經に、女レ懷春、吉士誘レ之とあり、男女の色情の盛なるいひしなり、春情とは色情といふこと。

衆口金を鑠す

衆口鑠レ金、積毀消レ骨といふこと文選に見ゆ、衆人の口に出る力の強きをいふ。

下の膏をしぼる

晋書に、剝二民脂膏一とあり、政事をなすものゝ、下民に對して重き税を賦課することをいふ。

慈悲は上より下る

顔氏家訓に、大風起レ自レ上而行レ於レ下者也とあり、なさけは上から下にくだるべきものゝことの意。

人心の同じからざるはその面の如し

左傳の襄公三十一年の傳に、子産曰、人心之不レ同、如二其面一焉、吾豈敢謂二子面如二我面一乎とあり、面のちがふほど

心もちがふものゝそとの意なり。

下地はすきなり御意はよし

かねて好物であるところへ、恰も案内をうけたといふが如きをいふ、即ち酒を好むものが、幸に他より酒の案内を受けしの類。

尻尾を見せぬ

陸遊が姚平小傳に見ゆ、物ごとをなすに、その不體裁なさまを人に見せぬことをいふ。

獅子心中の蟲

仁王經に、如三獅子身中蟲自食二獅子一とあり、内より災害をなすことにたとふ。

四十二の物爭

骰子の目の數を合すれば二十一ありて、二個を合すれば四十二となる、これによりて賭博をなすことを四十二の物爭といふなり。

悪琴調はず

詩經に、妻子和合、如レ鼓二悪琴一とあり、これは夫婦の睦ひきことにて、調はずといふは、不和なることにいふ。

師走の蛙

物事をかんがへるといふ謎なり、かんがへると寒蛙(カンガヘル)とを通じたるなり。

十分はこぼるゝ

家語に、夫物悪有二滿而不レ覆者一哉とあり、一ぱいになるゝ溢るゝものゝそとの意。

仁者敵なし

孟子曰、仁者無レ敵と梁惠王の篇に見ゆ、仁心のあるものには敵対するものがないとの意。

上手な偽よりはド手な實意の方がよい

説苑に、智而用レ私、不レ如二愚而用一レ公とあり、たくみに偽りをいはんよりは實意のつたなきがまさるとの意。

杓子は耳かきにならず

形はよく似たれども、その任なり器なりにあらざれば、用に立たぬものとの意。

死しての長者より生きての貧人

身後慳レ金柱二北斗一、不レ如二生前一樽酒一といふと白氏文

墓に見ゆ、死でから後に富みしとて効のあるものにあらず、生前の貧しきがまされりとの意。

征知らずの碁打かな

碁につたなきものが、征にかゝつて居ることを知らずに、逃げらるゝとおもつて、石を多くして取られ、あとのさんざんになることをいひしなり。

しのをつく雨

篠をつかねたるがごとくに降る雨をいふ、篠とは竹の細小なるものなり古歌に

むさし野の篠をたばねてふる雨に螢ならではなく虫もなし

十八の後家は立つが四十後家はたゝぬ

十八九のときに後家となりしものは、よく操を守ることを得れども、四十にて後家となりしものは、よく操をたてるものが少ないとの意なり、四十を三十といふところもあるが如し。

死んだ子の年を數ふ

何んの効もなきことをいふ。

死んだ龜さん咄にならぬ

死んだ龜さんとは、何の意味もなきことにて、咄にならぬとの意なり

釋迦に經文、孔子に悟道

その道に達したる人に對して、その道の講釋するといふことにて、釋迦には出離解脱の法を說き、孔子には仁義道德の教を說くなり、俗に釋迦に說法といふもこれに同じ。

白鼠

白鼠とは福の神といふことにて、商家の番頭などが、主人に長〳〵よく勤めあげしものゝことをいふ、廣小路に。

酒藏の白鼠なり上野の花

春秋に富む

老いさきの長きをいふ、菅公の詩にも、君富二春秋一とあり。

死せる孔明生ける仲達を走らす

三國志に見ゆ、餘殘をもつて能く敵をおそれしむるが如きをいふ。

死は易く生は難し

慷慨就レ死易、從容就レ義難といふ詩の句あり、死することは易きものなれども、生きるといふは容易ならぬことゝの意。

十目の視るところ

大學に、十目之所レ視、十手之所レ指、其嚴乎とあり、十人の目で視たことに違ひはないとの意、十人とは大數を言ひしなり。

しめり茶臼笠の雪

尤章紙の、おもきもの品々といふ、條に、おもきは父母の恩、ためしのかぶと、具足、くさり袴、古ぬの子、年貢俵、商人の海道荷下手の論、上手のくすし、しめり茶臼、貧のおつぼねのり物、ぶしやうものゝたちね、笠の雪とあり、重きといふことなり。

十五六歳の處女は箸の倒れたも可笑がる

何んでもないことにも笑ふとの意

十七八歳は寢濃いものの

十七八のころには、よく寢たがるものとの意。

死人に口なし

死んだものは物いはぬから、何んといふても證據にならぬとの意。

舌をまく

史記の楊雄の傳に見ゆ、感ずること深くして、口に述べがたきをいふなり。

（俗語）

自業自得

正法會經に見ゆ、どこへも小言のいひどころのなきをいふわれから求めたるなり。

獅子奮迅

大智度論に、譬如ニ獅子奮迅大吼一とあり、氣勢のつよく盛んなることをいふ。

舌長い

毛傳に、長舌者能多言者也とあり、詰經に、婦有二長舌一とあり よくしやべるものをいふ。

十のしま

あほといふ隠語なり、十の二字を合すればあの字となりしの扉にまの旁をすればほとなるをいふ。

正月詞

聖學自在に、正月には己が心中には苦しく悲しきことあれども、人に對しては御目出度と、時のよろしきに隠ずるを以て正月詞といふ、わが心になきことを云ふ。

諸行無常

涅槃經にあり、又平家物語に、祇園精舎の鐘の聲諸行無常の響ありとあり、世のつねならぬをいふ。

職敵

亢倉子に、同レ道者相愛、同レ藝者相嫉とあり、同じ職業をなすものは互にねたみ合ふとの意。

尻こそばい

何となく心の安からぬをいふ。

斟酌

國語に出づ、四書通義に、仁山金氏いふ、一一は俗語なり、勺をもつて酒を取り、以て器に入れてその淺深を酌量ることなりと、これくみはかるの意、今俗に辞退する心に用ゐるはあたらざるなり。

塩らし

人のみやびやかなるをいふ、みにくう、いやしきをぶしほといふ、居家必備にいふ、女人之面醜陋、謂二之無塩一、齊有二醜女一云々と、これより出でしならん。

精進

師古が漢書の註に、精明而進趨也とあり、佛書に多し、今潔齋することを精進といふ、佛書によりて勤行精一にして進修するの意をとりしなり。

初心　首楞殿經に見ゆ、初學の人といふ意なり。

殿　論語に出づ、後輩と同じ。

洒落者　黄山谷曰、春陸周茂叔、人品甚高、胸中洒落、如二光風霽月一と、今の俗にシャレモノといふとは異れり。

如在　論語の八佾の篇に見ゆ、俗に人に疎略するを如在するといふは意義あることなり。

子細　杜の詩に、野橋分二子細一とあり、物のこまかなるをいふ。

時宜　俗に禮することを時宜するといふ、曲禮より出でしなり、

白癩　左傳の成公傳に見ゆ。

上戸　野槌にいふ、酒を飲むものを大戸といふ、飲まざるものを小戸といふことは、白氏文集に見えたり、日本にては上戸下戸といふ、大戸小戸といふに同じ。

無二四度解一　小町の歌に「しどけなきねくだれ髪を見せじとや、はだかくわたる今朝の朝がほ」とあり。

取次　下學集に、取次筋斗とあり、源氏梅が枝の卷に、しどろもどろにあいさやうづきとあり、次第といふ參なり、一說には容易の義なりともいふ。

云々　日本紀に、云々の字をしかくしかくと訓ましたり、河海抄に、いろくのいひごとを云ふなりと。

車軸　雨の大なるをいふ、法苑珠林に見ゆ、又涙車軸の如し、雨車軸などいふことあり、降ることの大なるにいひしならん

邪見　法華經に見ゆ、見識のよこしまなることをいふ、俗によそ〳〵しく扱かふをじやけんといふは、邪慳の字を用ゐて、邪見とはおのづから別なり。

失却　うしなうことをいふ、却とは語助の辭にて、忘却、破却などいふの類なり。

差是　その出所を詳にせずといへども、白氏文集には、——をしなやかとよめり。

塩垂　神事式の忘詞に、泣〳〵ことを塩たるゝといふ、源氏の須磨の巻に、いたふしほたれたまふとあり。

色代　代は易るなり、人を禮してその顏色をかへることは敬ふの至りなりと、よりて敬禮するを色代するといふ。

自墮落　釋氏要覽に見ゆ、志の堅固ならずして、みづから棄つるをじだらくといへり。

爾來　その後といふこと、孔明の出師表に見ゆ。

（ひ）

人は一代名は永代　本朝文粹に、夫形者百年之旅館也、名者萬代之嘉賓也とあり、人はたゞ一代であれど、その名は末の末まで傳はるものとの意、

人は武士花は櫻　本居宣長翁の歌に

しきしまのやまと心を人とはゞ朝日にほふやまざくらかな

とあり、この諺は武士をもつて無上の榮となせしときの諺なり。

人の一生は重きを負ふて遠きを行くが如し

東照公の遺訓のはじめにあり、人が世にあるは中々大役のあるものぞとの意なり。

人のなさけは庫にあるとき

菅家御集に、友といふ題にて

あはれわれうき今までの友ぞなき、人のなさけは世にありしほど

とあり、これにて知るべし。

人の口に甘ければわが口にも甘し

性靈集に、諺云、奴口甘、耶舌甜とあり、人によけれはわれにもよく、人につらければわれにもつらしとの意。

人の口おそろし

夫木集に、世の中は虎狼も何ならじ、人の口こそなほまさりけれ」と見ゆ、この諺の意と同じ。

人は善惡の友による

水從二方圓一器一、人依二善惡之友一といふに本づく、人は友のよしあしによつて、よくもなりあしくもなるとの意。

人ごといはゞ目代おけ

龍城錄に、白日無レ談レ人、談レ人則害生とあると同じ意なり、みだりに人の失を語らんには、禍の至らんこと手のひらをさすが如し、さればといふたびに目代おかんもいかゞなれば畢竟はい

はずともありなんとの意。

百日の旱にはあかで、一日の洪水にあく

田家五行に、千日晴不レ厭、一日雨便厭とあり、諺と意同じ。

百官ふらり

役にも立たぬ古器古書・盆などを買集めて楽むものゝ愚をわらひていふなり、南燕の王始なるものの亂を起し、百官を制してその爇にさゞけしに、王始亡ぶるに及び、百官を得し殘爇は賊徒となりて、百官の名は中にふらゝりといふ心より出しものといふ。

貧の盗人

潛夫論に、禮義生二於富足一、盗竊起二於貧窮一とあるに本づく

意はおのづから明かならん。

日に三たびわが身をかへりみる

論語に、子曰、吾日三省吾身とあるにもとづく、日に三度もわが身の行をかんがへて見るとの意。

日暮れて道遠し

史記の伍子胥の傳に、吾日暮途遠、故倒行而逆二施之一とあるより出づ、前途の遠きに、日の暮れはてたるをいふ。

書生るゝ子は父に似る　夜生るゝ子は母に似る

大戴禮に本づきしなり、その意は明かならん。

晝は茅かれ、夜は繩なへ

時經にある語なり、晝夜によくつとめよとの意。

隙の駒

史記の魏豹の傳に、人生ニ一世間一、如ニ白駒過一レ隙耳と

あるに出づ、月日のたつことをいふ。

低きところに水たまる

論語に、子貢曰、誅之不善、不ニ如レ是之甚一也、是以君子惡レ居ニ下流一、天下之惡皆歸焉とあるに同じ。

比翼連理の契

白氏の長恨歌に、在レ天願為ニ連理枝一とあり、これに本づくなり、これはもと唐の玄宗の楊貴妃と契をなしゝことを作りしものなり。

百日の説法屁一つ

永き年月をかさねて經營せしことも、一朝の飽行ありしために全く水泡に歸したるをいふ。

人を使へば苦をつかふ

人を使ふは苦勞の種子なりとの意。

人を鏡とせよ

人をもて鏡とすれば得失吉凶を知るべしとの意。

人は死しても名を留め虎は死して皮を留む

碑雅にいふ、語曰、人死留レ名、豹死留レ皮、故君子疾ニ沒レ世而名不一レ稱焉とあり、人は名をたつとむとの意。

人に舞はさるゝ

史記に、桑皇漢武時蘇迂性の士のために錄弄せらる、偶の若く然り

とあり、偶とは人形のことなり、人に愚弄せらるゝことが人形が人形師に舞弄せらるゝと同じとの意、

人の故を見て我身おもへ

論語に、子曰、見レ賢思レ齊焉、見レ不レ賢而内自省也

とあり、人のすがたを見てわがふりを直せとのいひなり。

人に一癖

晋書に、王濟に馬癖あり、和嶠に錢癖あり、杜預に左傳の癖ありと云々とあり、人にはかならず一つの癖のあるものとの意。

慈鎮和尚の歌に

人ごとに一つのくせはあるものを、我にはゆるせしきしまの道

羊のあゆみ

摩耶經の偈に、譬ば旃陀羅の羊を驅りて屠所に就くが如し、歩々死地に近づく、人命またこれに過ぐとあり。

赤染右衛門の歌に

けふもまた午の日にこそ吹つなれひつじのあゆみちかづきにけり

とあり、人命も屠所におもむく羊の如しとなり。

一つ穴の狐

漢書の楊敞の傳に、古與レ今如二一丘貉一とあり、同類の饒なり。

人ある中に人無し

人は衆多なりといへども、完全無缺の人は少しとの意、

古歌にも

人おほき人の中にも人ぞなき、人になれ人人になせ人

とあり、これと同意なり。

人は木石にあらず

文選に、人非二木石一、豈無レ感 とあり、伊勢物語に、いはきにしあらねば、心ぐるしとや思ひけむ云々とあり、人には色慾のないものはなしとの意にいふ。

人の噂も七十五日

人の口にかゝりて批評せらるゝことも一月半も過ぎなば、おのづと消ゆ失せるものとの意。

人の價はその人が死なねば定まらぬ

書言故事に、晋の劉殺のいふ、丈夫蓋レ棺事方定 とあり、

羊に虎の皮を着せたやうな

後漢書に、羊質虎文、見レ豹自恐 とあり、愚なるものゝ賢者のまねするをいふ。

鹿角菜の行列

草書の拙きものをいふ。

火水になりて

熱中することをいふ。

百里の道は九十里に半す

戰國策に、行二百里一者、半二九十里一 此言二末路之難一 とあり、すべての事が末の一段の最も大切なることをいふ。

百尺竿頭に一歩を進む

書言故事にあり、餘韻を長からし むると同じ。

百聞は一見に如かず

漢書の趙充國の傳に見ゆ、百たびはなしにて聞くよりは、一たび實物を見るがましであるとの意。

氷炭容れず

楚辭に、氷炭不二以可一相並一とあり、性質の反對なるものなどにいふ。

牝鷄のあした

書經に見ゆ、婦が專にするときは、その家がほろぶるといふの戒にて、細君に權利のつよきをいふ。

貧すれば鈍する

この諺の意と同じ。

人を呪はゞ穴二つ

古歌に

あしかれと人をばいはじ難波がた、わが身のとがにかへるしら波

とあり又

つみもなき人をうれへば忘れぐさ、おのが上にぞおふといふなる

この歌この諺をいひしなり。

人の口に戸が閉てられぬ

國語に、召公曰、防二民之口一、甚於防二川一、川壅而潰、傷レ人必多、民亦如レ之とあり、風説や誹謗などをとゞむることあたはざるにいひしなり。

人の行末と水の流は知れぬもの

方丈記にいふ、行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にはあらず よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとゞまることなし、世の中にある人とすみかとまた此の如し云々、又大納言師氏の歌に

水の面こ浮きてたゞよふうたかたのまだきえぬ間にかはる世の中

とあり、これも亦同じ意なり。

美女は悪女の仇

說苑の尊賢篇に、美女者醜婦之仇也、盛德之士、亂世所疏也、正直之行、邪枉所憎也とあり、よいものはわるいものにくまるゝとの意。

貧乏するときは、智慧のかゞみも曇るといふの義なり。

貧は泣きより

同病相あはれむことをいふ。

貧乏鬮を引く

利益の少きことにいひ、又頼みすくなきことにもいふ。

貧のぬすみ、戀の歌

貧するときは人の物をぬすむ心をおこし、戀の心のさかんになるときは歌を以てその意中をもらすといふの意。

膝とも談合

一人にて思案せんよりは、誰にか相談してその人の意見を聞くべしと

◎道。

尾生の信

史記の蘇秦の傳に、尾生與二女子一、期二於梁下一、女子不レ來、水至レ去去、抱レ柱而死とあり、つきぬ約束をおもんずるの愚なることをあざけるをいひしなり。

他人の棚卸をする

他人の惡事をいふことなり。

庇を貸して表屋を取らる

おのが餘光をかしたるものに、その地位を奪はるゝことをいふ。

引かれもの〻小謠

罪を犯したものが拘引せらるゝとき、少しも羞恥の心なく、鼻謠をうたつて行くものをいふ。

貧乏神の子澤山

貧人は富人に比して子供の多きことをいふ、この諺の轉じて貧乏柿に子澤山ともいふ、子とは種子なり。

百で買つた馬のやうな

寢てばかり居るものをいふ。

冷酒と親の意見は後藥

冷酒の醉のおそくまはるが如く、親の意見も後になりなるほど、尤も氣のつくことをいふ。

秘事は睫毛のごとし

睫は眼のそばにあれども見ぬが如く、秘傳といふことも聞けば易きことにして、習はねば知り得ざるをいふ。

（も）

持つべきものは子

謡曲の苅萱に、何ものがこの山路をしのぎ、はる〳〵来候ふべき、持つべきものは子にて候ふとあり、又菅原傳授手習鑑にも、この子がなくばいつまでも人でなしといはれんものを、持つべきものは子なるぞにこそ〳〵とあり。

元の木阿彌

筒井陽舞坊順昭、二十八歳にて病死す、この時その子伊賀守定次（順慶のこと）わづかに一歳なり、順昭遺言して三年の間は卒去をかくしおくべしとありければ、木阿彌といふ盲人がその形順昭に似たるゆゑ、他國より使ひ来る時は、かの盲人をほのぐらき所におき、

順昭は病中の體にもてなし、相見せしむ、定次三歳の時はじめて喪を發す、こゝに至つて木阿彌なりしことを諸人しれり、今俗の諺に〳〵〳〵もとの木阿彌といふはこれより出でたり。

一旦貧窮より起りて資産をつくりたるものが、再び破産してもとの貧窮にかへるをいふ。

元木にまさるうら木なし

木の芽生が元の木より劣るとの意なり、後の妻より前の妻がよかりしなどにいふ。

餅はもちや

おの〳〵専門にするところありとの意なり、海のことは舟人、山のことは山人といふの類なり。

餅より粉に要る

主なるものよりも、賓なるものに要るとの意、装飾に多く費ゆるとの意にもいふ。

燃る火に薪

帝範に、惡ニ火之燃一、添レ薪覩レ止ニ其猷一とあり、この諺の出しものならん。

門に入れば笠ぬげ

神代の巻の素盞嗚尊の故事より出づ、世諺に、著ニ笠盞一、以入ニ他人屋内一とあり、これより出でしならん。

門前に市を成す

漢書に、臣門如レ市、臣心如レ水とあり、多く人の徳を慕つて集り來ることをいふ。

紅葉の媒

太平廣記に見ゆ、(前略)韓夫人笑て詩を作りていふ、一聯佳句隨ニ流水一、十載幽思藏ニ素懷一、今日卻成ニ題鳳友一、方知紅葉是良媒、と、又年中行事に。

ながれての名にや立なんくれなゐの一葉をうけし水くきのあと

とあり、紅葉が媒となつて夫婦の縁をむすびしといふ故事なり。

藻に棲む虫のわれから招く

古今集に

あきのかる藻にすむ虫のわれからに音をこそなかめ世をうらみじとあり、我より禍福をまねくの意なり。

燃ゆる火に油をかける

怒れるものを、更にいからすの意。

燃ねぐひに火つき易し

一たび溺れたることは、これを禁止したりとも、一たびその事に接するときは、直に心をとろかすものなりとの意、俗に一旦別れし女房がまた出會ふときなどにいふ。

物盛なれば衰ふ

徒然草の竹林院の條に、月滿ちてはかけ、物盛にしてはおとろふよろづのこと、さきのつまりたるはやぶれにちかきみちなり云々とあり諺の意と同じ。

物狂ひ水こぼさず

狂人おみづから暴をなすものにあらず、他の刺撃をうけてはじめてその暴をたくましくするものとの意、淮南子に、狂馬不レ顧レ木云々とあるも同じ意ならん。

物言へば唇寒し秋の風

口は禍の門といふが如く、ウカと物いふときは己れの不利をまねくものなりとの意。

物はいひ様で圭がたつ

俗歌に、丸い玉子も切りよで四角、ものは言ひよで圭がたつ」とあり、これと同じ意なり。

持ちつ持たれつ

互ひにたすけ合ふをいふ。

物の名も所によりてかはる

古歌に

物の名もところによりてかはりけりなにはのあしは伊勢の濱をぎ

とあり、これによれるならん。

物のあはれは秋こそまされ

徒然草に、折ふしのうつりかはるこそ、ものごとに哀なれ、もの、あはれは秋こそまされとあり。

門前の小僧習はぬ經をよむ

勸學院の雀が蒙求をさへづるといふに同じ、(〈) の部を見て參看すべし。

門徒物知らず

他宗の人が、門徒をそしりていひしことなり、親鸞聖のものは、一遍に彌陀を尊信することを知りて、學問することを知らずといふの意。

物は新を用ひ人は古を用ふ

尚書に、人性貴レ舊、器非レ求レ舊惟新とあり、これより出でしなるべし。

持つたが因果

持たずしてよきものを、持つたが爲めにそれだけの處置をせねばならぬをいふ。

木欒子は三年みがいても黑い

天性色の黑い人は、いかほど磨くとも色の白くなるはづはなしとのことをいひしなり。

（俗語）

もつけの幸　思ひもうけぬ幸といふこと。

紋切形　通常の定まりたる仕方をいふ。

目論　史記の越の世家に出つ、計畫することをいふ、今目論見と

かく見の字は重複ならん。

勿論　下學集に、眸、休、體の三字皆同字、勿は无(無)也、勿体

の二字は卽ち正体無き義なり、倭俗の樣狀に無勿體といふ

は大い正理を失ふなり、子細に之を思ふべしと。

六書正僞に、事物の物、本勿の字なり、後人牛を加へてこれ

を別つと、然るときは物の本は勿字なり、俗の勿体は則ち物

體なり、人物のすべよきを物体のあるといふ、君父を蔑

にし、神明を侮る等は、人物の正体にあらざるゆゑに、

これを物体なしといふなりと。

沐浴　沐は髮をあらふこと、浴は身を洗ふをいふ。

物怪　俗に非常の凶事を物怪といふ、又俗に人の大に怨ることを

もつけうおこすといふは、物怪おこすの意なり。

勿論　源氏の橋姫の卷に、ろなふ物の用にさはかりとあり、ろなふ

とは勿レ論なり。

熟く　萬葉集に、熟の字をもど〳〵と訓せり。

目禮　書叙指南にいふ、傾二視其人一曰、眥目禮爲とあり。

（せ）

千里の行は一歩より始まる

老子に、合抱之木、生二於毫末一、九層之臺、起二於累土一、千里之行、始二於足下一とあり、遠い路も一ト足からはまるとの意。

千里も一里

遠きを遠しとせざるの意。

千鈞の弩は鼷鼠のために放たず

魏志に、千鈞之弩、不レ為二鼷鼠一發上とあり、小を制するに大を用ゐざるをいふ。

千丈の隄も蟻の穴より崩る

韓非子に、千丈之隄、以二螻蟻之穴一潰、百尺之室、以二突隙之烟一焚とあり、わづかなることから大事が生ずるの意。

千金の箒

魏の文帝の典論にあり、わが身の程を見知らざるの誤なりと譏る。

千日の勤學より一日の名匠

楊子法言に、務學者不レ如二務求一レ師、師者人之模範也とあり、自分でつとめんよりは師匠につくが一番なれとの意。

千石萬石も食一杯

韓詩外傳に、北郭先生の妻いふ、胸をむすび騎を列するも、安んずる所は膝を容るゝに過ぎず、食前方丈も甘んずるところは、一肉の味に過ぎずとあり、意はおのづから明かなり。

千金の子は堂に垂せず

史記に、千金之子、不レ垂レ堂、百金之子、不レ騎レ衡とあり、身をつゝしむものは危きに居らずとの意。

千日に刈つたかや

積日の經營勞苦を一朝にうしなふことにいふ。

千里の馬はあれど、一人の伯樂はなし

韓退之の雜說に、世有二伯樂一、然後有二千里馬一、千里馬常有、而伯樂不二常有一　とあるに本づく、よい馬はあつても騎手がない　との意。

千の倉より子は寶

山上憶良の歌に

白がねも黃金も玉もなにかせんまさるたから子にしかめやも

とあり、多くの財寶よりも子を貴しとするの意。

千両の鷹もはなして見ねば分らぬ

何事でも話して見ざれば、成功するとも成功せぬともわからぬものとの意、話してと放してと相通ずるなり。

千人の諾々は一士の諤々に如かず

史記の商君の傳に、千人之諾々、不レ如二一士諤々一、千羊之皮、不レ如二一狐之腋一とあり、これに本づく。

千両のかたに編笠一蓋

家資分散するときなどに、少しの財産を多くの債權者に分けかへすがかきをいふ。

千疊敷で寢ても疊一枚

千石萬石も食一杯といふに同じ、參看せよ。

聖人に夢なし

淮南子に、夫聖人用レ心、杖レ性依レ神、相扶而得二終始一、是故、其寐不レ夢、其覺不レ憂 とあり、又莊子に、古の眞人はその寢るに夢みず、その覺るに憂なしとあり、意は明かなり。

急いては事を仕損ずる

論語に、子貢爲二宰一、問レ政、子曰、無レ欲レ速、無レ見二小利一、欲レ速則不レ達、見二小利一大事不レ成 とあり、

又古歌にも

いそがずばぬれましものを旅人のあとより晴るゝ野路の村雨

とあり、意は同じ。

積羽船を沈ましむ

史記の語なり、その意は、小事も積れば つひに大事となるに至るとの意。

善惡は友を見よ

史記に、語にいふ、その人を知らざればその友を視よとあり、人は類をもつて集るものなれば、その交る友を見て、その人の如何を知るべしとの意。

鶺鴒の親しむやう

詩經の棠棣の篇に、脊令在レ原、兄弟急難 とあり、鶺鴒は兄弟なかのよいものとて、その相親しむやうにせよとの意。

栴檀は二葉より香し

源平盛衰記に見ゆ、後々に名をあぐるほどのものは、まだ幼き時

より人なみならぬものであるとの意。

雪隱で饅頭

人知れずに己れ一人にて利を占むるをいふとも、又旨しきたなしといふの意なりともいふ、何れにても聞ゆ。

雪隱で槍つかふやう

十分にはたらくこと能はざるをいふ。

錢なしの市立

論衡に、手中無レ錢之レ市、貨主問曰、錢何ノ在、對曰、無レ錢、貨主必不レ與也、夫胸中不レ學、猶二手中無一レ錢也とあり、目的を達すること能はざるに奔走するがごときをいふ。

錢金圍うても姫を圍うな

俚歌にいふ「錢や金こそ圍てもよけれ、姫を圍うな婆になら」と、姫とは娘のことにて、嫁入どきには嫁入させよとの意。

前車のくつがへるは後車のいましめ

史記の賈誼の傳に、前車覆後車誡とあり、前人のしくじりを見て用心せよとの意。

前事の忘れざるは後事の師

史記の秦始皇本紀に見にたり、意は明かなり。

背に腹は代へられぬ

物ごとには輕重緩急の別ありて、眼前の切迫せしことのためには後々のことを顧みる遑のなきものとの意。

錢は足なくして走る

錢のことをおあしといふよりいひしなり。

錢金は他人

錢金に親子なし

二つながら同じ意にて、金錢については親子の間たりとも嚴重にせねばならぬとの義。

船頭多くして船山に上る

詩經の小旻篇に、謀夫孔多、是用不集とあり、これと同じ意にて、小事を多人數にて手を着くるときは、却てその成功を妨ぐるのみならず、或は目的以外に走ることありとの意。

小の虫を殺して大の虫を助ける

物の小にして且つ輕きものには不利にても、大にして且つ重きものゝ利は計らざるべからざるをいふ。

清水に魚すまず

家語に、水至清則無レ魚、人至察則無レ徳とあり、あまりきれいな水には魚が住まず、人もあまりに氣がつきすぎると、その徳がうすくなるものとの意。

小敵と見て侮るな

左傳に、臧文仲のいふ、國小不レ可レ易、無レ備不レ可レ恃とあり、敵は小なりとも馬鹿にして油斷をすなとの意。

背を知らぬ女の智慧

後の思慮なきをいふ。

小智は菩提の妨

莊子にあり、小才智は世に用ふるところなしとの意。

（俗語）

折角

前漢書の玉鹿子宗の傳に、朱雲と五鹿充宗と易を論じて、類りに〻鹿をいひつめたり、これを時の人が、朱雲五鹿が角を折るといひしより、折角といふことば出でたりと。

折檻

朱雲の傳より出ゴ、朱雲が成帝をつよく諫めしかば、成帝は怒つて殿上より朱雲をおひ下らせられしに、朱雲は御殿の檻に取りついて下りず、終に檻か折れたりと、これより主人を諫むることを一一と書くと。

饒

俗に物の多きことをセウがある、又はセウといふはこの字を書くべきなれ。

刹那

倶舎論に見ゆ、時の極めて少きをいふなり。

無詮

何の効もなきことをいふ。

穿鑿

漢書の禮樂志に見ゆ、よくほじくりさがすことをいふ。

拙者

朱子文集に、自ら稱して拙者といふとあり。

先鞭を着く

晉書故事に見ゆ、人より先きに手を着けることをいひしなり。

先入主となる

楊子家訓に見ゆ、さきに聞きこんだことが主になるとの意なり。

（す）

過ぎたるは及ばざるが如し

論語の先進に見ゆ、子曰、過猶レ不レ及と意味のつから明かなり。

水魚のおもひをなす

魚と水といふた同じ、（う）の部を參看せよ。

雀の千聲より鶴の一聲

滿清の鄭陽の傳に、鳳鳥衆レ百、不レ如二一鶴一とあり、これと同じ意にて、千羽の雀のさわぐも、鶴の一聲にてはおよばぬとの意。

好いた同士は泣いてもつれる

相思相愛に好き好かれかどいふものは、難儀苦勞をしながらも一つにをるものであるとの意。

數寄に赤烏帽子

貳臣傳雜考に、蜘尻に殘教將軍の時、松浦肥前守、數寄ものの赤烏帽子を着してまゐりしかば、將軍その姿を自ら圖にして賜ひし云々とあり、數寄のをかしきことをいふ。

雀の子飼

吉原鑑に見ゆ、飯のほどいたるにてそだつゆゑにいふと、いづれの傾城にても、初對面には飯くはぬものゆゑ、ひそかに飯に湯かけしものをかくして拾いて食ふよりとあり。

雀の子に針

弱きものを苛酷にとりあつかふことをいふ。

雀百までおどりは忘れぬ

禁酒なるものは老いても向かはらぬものなるをいふ。

墨は餓鬼にすらせよ、筆は鬼にとらせよ

避暑録に、麗レ墨如ニ病兒一、把レ筆如ニ壯夫一とあり、餓鬼とは子どものことにて、墨は力を入れずにするべく、筆は力を入れてもよとの意。

寸鐵人を殺す

槐林玉露に見ゆ、只有ニ寸鐵一、便可ニ殺レ人と、わづかのもので人をころすほどの力ありとの意。

寸善尺魔

善は早く爲せ、一尺ほど躊躇する間に、魔が生じていかなる障碍ともなるべきなりと、こは佛書より出でしなり。

寸陰を惜む

晉書に、陶侃語レ人曰、大禹聖者、乃惜ニ寸陰一云々と、わづかのひまもおしむべしとの意。

末の松山波こさじ

いつまでもその約束を破らざるをいふ、百人一首の中に

契りきなかたみにそでをしぼりつゝ末の松山波こさじとは

酸いも甘いも承知

處世の難きをいふなり。

すぐれてよきものは、すぐれて惡し

南文類聚に、叔向欲レ娶ニ曲公巫臣氏一、其母曰、吾聞甚美、必有ニ甚惡一とあり、意は明かなり。

滑つたのころんだのといふ

樓々に故障をつけることをいふ。

角に雀

古き歌に

住吉のすみにすぶめが巣をかけて、さぞや鵜はすみよかるらん。

とあり、人の居所などの住み易きをいふ。

雀が鷹を生む

おろかなる人に賢き子のあるをいふ。

榴木で腹を切る

その形容ばかりなるをいふ。

榴木で重箱を洗ふ

すみ〳〵に手のとゞかぬことをいふ。

[illegible]

末の百両より今の五十両

宇治拾遺物語に、今日の命物喰はずには生くべからず、後の千兩の黄金も更に益なしとぞいひける、それより後の千金といふこと云々あり、手つ取りばやきをいふ。

好かれて難義

人に慕はれて却て難義するといふこと、俚歌に「いやで幸ひ好れて困る」といふあり、これも同じ意なり。

捨てる子も籠の下

子を捨てるにも雨露のかゝらぬ籠の下に招るは、親の子を愛する情の切なるをいふ。

酢の蒟蒻のと品つけて

室町千疊敷に見ゆ、種々なる苦惱をもち込むことをいふ。

砂をかむやうな

乾燥無味なることにいふ

砂の中の黄金

愚者の多き中に一人の賢者のあるかきをいふ、鷄群の一鶴といふも同じ意なり。

好きこそ物の上手

好んですることは自然とその事に熟するものとの意。

脛に疵あるものは、竹藪に入る能はず

惡事をはたらきしものは、人中に出ることのならぬものとの意。

西瓜船の着いたやう

坊主の多の集まりしことを形容せしなり。

粹は恪氣せぬもの

傾城酒呑童子に、何んと粹は恪氣せぬものぞ、どこからの法度で云々と見ねたり。

雀のなみだほど

極めて僅少なることをいふ。

水火の爭ひ

水と火とは相容れざるものなり、意見の全く反するをいふ。

捨てる神あれば助ける神もある

彼處にて失敗失望することありとも、又此處で成功することあるものなれば、落膽すべきにあらずとの意。